



お茶大子ども学  
ブックレット  
Vol.1

第1回  
お茶大 *ECCELL* 子ども学シンポジウム  
2011.3.13

# 子育て力の危機と創生

～エンパワーメントの視点から～

牧野 カツコ氏

家族と地域の子育て力をどう高めるか

星 三和子氏

フランス・イタリアにおける子育て力育成の現状



「お茶大子ども学ブックレット」について

このブックレットは、お茶の水女子大学 ECCELL プロジェクト（国立大学法人特別経費事業「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」Early Childhood Care/Education and Lifelong Learning）が発行するものです。本事業は、学生と社会人がともに子ども学すること、子ども学を生涯学び直すことをとおして、大人が成長していく場を創造することをめざしています。ECCELL で企画した子ども学シンポジウム、保育フォーラム、特別講義などの記録を少しでも多くの方々と共有するために、ブックレットの形で発行し、学びの輪を広げたいと考えます。

\* 『お茶大子ども学ブックレット』は株式会社ベネッセコーポレーション寄付金により作成されました。

## はじめに

平成23年3月11日、東日本大震災が起こった。そのわずか2日後の13日、本プロジェクト主催の公開シンポジウムが、お二人の講師をお招きし本学で開催された。いま思い起こすと、その時は相次ぐ余震、津波被害を知らせるマスコミ報道のさなかで、東京は未曾有の不安、恐怖と日常性が不可思議にセツトになった異常な雰囲気に含まれていた。シンポジウム当日の13日は、原発事故を併発させてしまったことを国民が（世界が）知らされた直後であり、他大学では軒並み入試をはじめとする学内行事を中止するなどの対策がとられる中、よく企画を実施できたものだと思ってしまう。あと2、3日、日程予定が遅かったら中止にしていただろう。そのシンポジウム記録がこの報告書に掲載されている。

会場全体の空気が、この国の未来に対する危機感と、またそれに立ち向かおうとする覚悟で張り詰めていた。地下鉄などの交通機関はいつ止まってしまうかわからない状況だったが、多くの方が会場まで駆けつけてくださった。参加者は皆、「いま子どもたちのために何ができるか」をこういう時こそ考えたい、何かせずにはいられない、という気持ちだったのではないか。講演者のお一人は、地震後一度もご自宅に戻れず直接会場に来てくださったっていた。講演に耳を傾ける人たちの真剣なまなざしを今も忘れることはできない。

乳幼児から老年までの異世代が多様な場で共に育ち学びあうモデル構築—この目的に向かって私たち

の教育研究プロジェクトはまだ走り出したばかりである。しかし、震災2日後のあのシンポジウムで確かに感じられた「熱」―危機感と真摯さ―は、これからの活動の大切な礎となるだろう。あの熱を過去のものとしないうために。

平成24年5月16日

ECCELLプロジェクトリーダー

浜口 順子

目次

開会のあいさつ

.....

7

講演者紹介

.....

10

牧野 カツコ氏 講演

.....

13

星 三和子氏 講演

.....

45

質疑応答

.....

72

# 第1回 お茶大 ECCELL子ども学シンポジウム

テーマ：「子育て力の危機と創生 ～エンパワーメントの視点から～」

日 時：平成23年3月13日（日）13:00～17:00

会 場：共通講義棟1号館304室

企画者：浜口 順子（お茶の水女子大学 准教授）

総合司会：榊原 洋一（お茶の水女子大学 教授）

シンポジウム司会：大戸 美也子（お茶の水女子大学 講師）

登壇者および演題

牧野 カツコ氏（お茶の水女子大学 名誉教授）

「日本社会における子育て力育成の課題 ―家族と地域の子育て力をどう高めるか―」

星 三和子氏（十文字学園女子大学 教授）

「フランス・イタリアにおける子育て力育成の現状」

## 【開会のあいさつ】

浜口 みなさま、こんにちは。浜口と申します。本日3月13日（東日本大震災の翌々日）は交通機関の障害などありながら、先生方も参加者の皆さんも苦勞して来られたことと思います。「こんな時に」という思いと、でも「こんな時だからこそ」という思いをもって来てくださったのではないのでしょうか。私たちも中止にするかどうかを考えましたけれども、「できることなら開催したほうがいいのではないか」という結論に達しました。大震災の発生で入試や行事を中止にする大学も多い中、お茶大は昨日入試を実施しました。受験生の中には空港で足止めになっている学生もいたようですけれど、たくさん受けに来てくれました。大変な思いをして来てくれた受験生のために入試を済ませたところです。こういうときだからこそ、学びたい人のためにできるだけ大学を開こうではないかという意志が、大学を運営する側にもありまして、そうした声にも励まされて本日は実施することになりました。私は一昨日一晩大学に泊まり、昨日帰宅しました。街は妙に静かで、しかし店に行くときに物が無いような状態であったり、テレビを消すとまた静かな世界であったり、非常に不思議な状態です。「日本はこれからどう変わっていくのか」とみなが深々と声を潜めて心配している。その中で、これからを担っていつてくれる子どもたちをどうやって守り、そしてどう育てていくのか。育てていく人たちが、どうやってもう一度歩み直すのか。いま重大な節目に立たされているのだと、私たちは大きな危機感を持って立っております。本日のタイトルには奇しくも「子育て力の危機」と、「危機」という言葉が入っていますけれども、このタイトルを考えたときよりも本当に何倍も「危機」という言葉が胸に迫ってきます。今まさに

このときに、このシンポジウムでみなさんとうとうした時間を持てますことを大変嬉しく存じます。

ECELL (エクセル: Early Childhood Care/Education and Lifelong Learning) とは、国立大学法人の特別経費プロジェクトです。だんだんと国立大学法人の予算が削減される中で、特色を出した研究をする大学に国が予算の枠を用意してくれています。私たちは保育、幼児教育、保育者養成という部分の重点研究を充実発展させるために、このECELLというプロジェクトを申請し、応援していただいています。今年度、つまり2010年4月から歩み始めたばかりですけれども、ECELLは社会人と学生が共に学び合いながら、保育について、また保育者を育てるということを考えながら自らも育つていく、そういう場をいろいろなたちで用意しようと考えています。

大きな柱としては二つあります。生涯学習部門と乳幼児教育部門です。生涯学習部門では、社会人を対象に夜間のプログラムを組んだり、休日に保育フォーラムを開いたりしています。夜間の授業では社会人と学部生、大学院生と一緒に学んでいます。社会人の方は科目等履修生として単位を取ることができる授業です。中には、自分から研究テーマを持って研究するという科目(「現代保育課題研究」など)も用意されています。そうした意味で、乳幼児教育・保育というテーマを巡って生涯学習を目指す部門です。

それからもう一つの部門は、乳幼児教育部門です。学部や大学院で開講している保育、幼児教育関連のプログラムの内容と教育方法





を改良することを目標としています。こちらの部門は、附属幼稚園や0～2歳の子どもたちのいる大学附属のいずみナーサリーと手を携えて、おもしろい教育プログラムを一緒につくっていくことも行っております。

この二つの部門が協力して、今年度最後の催しとして、最前線の保育問題について研究活動を展開しておられる先生方を外部からお招きし公開シンポジウムの開催を企画しました。本日の講師お二人の他に村山祐一先生のご講演も予定していましたが、残念ながら村山先生は交通事情が悪くお越しいただけなくなりました。村山先生は「場を改めてまた」と今朝メールをくださっておりますので、そのときには皆さまにお声かけをしたいと思います。お二人のご講演後、みなさま方からご質問やご意見をいただいて、対話のできる場になればと期待しております。本日はどうぞよろしく願いたします。ありがとうございました。

榎原 どうもありがとうございました。それでは大戸先生、この後のシンポジウムの司会をよろしくお願いたします。

## 【講演者紹介】

大戸 司会を担当いたします大戸でございます。どうぞよろしく願います。

「子育て」という言葉は大変古い言葉ですが、最近では新しい言葉でもあります。人類誕生のときから次世代を次々育て、これを繰り返して今日に至っているわけです。子育ては必ずしも親だけの仕事ではなくて、家族や近辺のいろいろな人々の力、あるいはいろいろなものを介在させながら、何十万年もいろいろなかたちで営んできた古い古い仕事の一つだろうと思います。この人類の基本的な営みは、単なる順送りの仕事というよりは、大変な仕事であることが最近クローズアップされたわけですね。ご存知の通り、最近注目を受けている「少子」傾向は、戦後のベビーブーム終了以降ずっと継続してきたのですが、「子育て」は時代のキーワードとして登場してきたわけですね。そして、この20年来、「子育て支援」と、「支援」が後ろにくつつくようになってきました。それまでにない言葉です。「子育て」という営みは、支援のいる大きな仕事であるという考えが、近年の共通した認識になってきたということです。

子どもが減るということは、人間がずっと代々受け継いできた「子育て力」、あるいは1人の人ではないとしても多くの人が関与してやってきた「子育て」の営みがやりにくくなっている状況の中で、こうした危機の背景にあるものを探り、「子育て」を蘇生させるにはどうしたらよいかを見直すのが、今回のシンポジウムの大きな課題だと思います。

本日は、この問題に関して大変お詳しい超一級のスピーカーである村山先生、牧野先生、星先生の3

人をお招きして一緒に考える機会を持てますことは大変有りがたいことだと思います。村山先生は本日参加できずに残念ですけれども、先生は保育所利用の保護者6万人に対して全国調査をして、保育所の保護者が子育てに関してどういう知識、感じを持っているかということについて、大変たくさん情報を持っておられます。村山先生が代表を務めておられる『保育情報』等でその調査研究の結果が報告されておりますので、またの機会に詳しく伺いできればと思います。

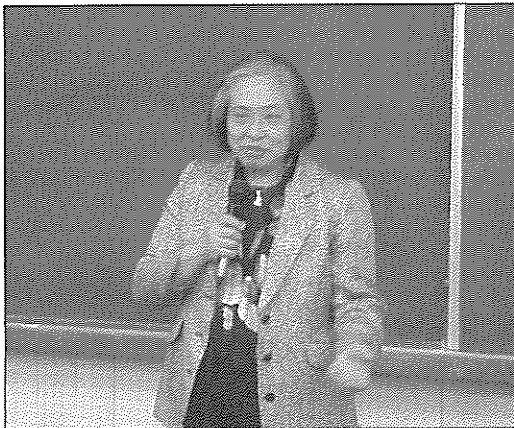
牧野先生と星先生のお二人に国内外の子育てに関する研究や子育て支援の実態等についてお話しいただきます。シンポジウムという表題になっておりますが、お二人の貴重な連続講演会というような趣になるかと思えますので、たっぷりとお話を伺うことができると思えます。

まず、牧野先生をご紹介させていただきます。お茶の水女子大学で長いこと教授をなされ、現在は本学名誉教授です。子育てについては、もう40年近く取り組んでおられる貴重な研究者です。みなさんは、「子育て不安」という言葉をきくとご存知かと思いますが、この言葉を創案したのは彼女です。70年代後半に、親が子どもを殺すという「子殺し」に焦点を当てて、その調査を始めたのですが、子どもを殺すに至らずとも、子育てに不安を持った親たちがいるという、何と言いますか、大変な地層を見つけたわけですね。子育てに多くの不安を持った親たちの不安のもとは何だろうかということはずっと調査されてきました。日本の家庭科教育学会の会長、日本家族社会学会会長を歴任され、それぞれの学会のリーダーとして大きな役目も果たしてこられました。今日会場にご参加の方々は、どちらかというと乳幼児教育や保育を専門とする仕事に就いておられる方が多いかと思われませんが、牧野先生の場合、国民一般の保育意識の底上げを考えられ、家庭科教育の中の「保育」に関心を持ってこられ、保育所や幼

稚園に限定せず家庭における子育てに関する研究も数多くあり、本日は大所高所からわが国の子育てに関するお話をお聞かせいただけると期待しております。

2番目にご講演いただきます星先生は、日本とフランス・イタリアの保育施設の実践の比較研究を専門としておられます。先生の研究手法は、保育施設における日々の生活場―食べたり、排泄したり、遊んだり、けんかしたり―を映像に収め、映像を媒体としながら、日本とイタリア、フランスの保育者が同じ事象をどう見るかというような観点から研究するという大変ユニークな研究を進めておられます。先月もイタリア、フランスの保育現場の研究を済ませられたばかりで、最新の情報をお伝えいただけるとのことです。

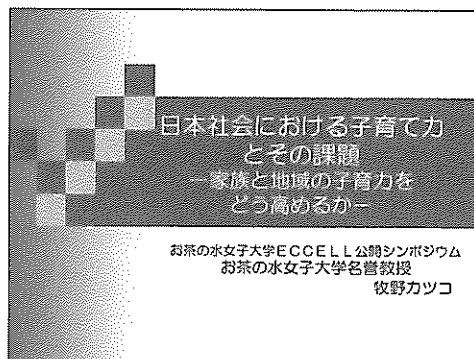
どちらの先生もいろいろな情報が盛りだくさんですので、ひよつとすると1時間を超えるかもしれませんけれども、それでは先生方、お話をどうぞよろしく願いたします。



【牧野 カツコ氏 講演】

日本社会における子育て力育成の課題

— 家族と地域の子育て力をどう高めるか —



みなさま、こんにちは。大きな地震で被害を受けた方もいらっしゃると思いますのに、本日はようこそここに集まってくださいました。本当に、東北地方はいま大変な状況にあります。こういう中で私たちが子どものことを考えられるというのは、とても深い意味があるのではないかと考えさせられております。人間が生きて無事で暮らしていけるということの意味の重さを感じさせられるときでもありますけれど、それにふさわしいような話ができますかどうか、ちよつと心配をしています。大戸先生のご丁寧な紹介、ありがとうございます。では早速、話をさせていただきます。

「家族と地域の子育て力をどう高めるか」というサブタイトルを付けてさせていただきました。施設や幼稚園、保育園などの専門的な場所での保育、子育てもあると思いますが、子どもが生まれた場所、「家族」について考えたいと思います。日本の家族の子育てはどうなっているのかということから、今日の大きなテーマである危機の問題を取り上げて、子どもたちの育ち方ということを考えてみたいと思います。最初に、日本の家族がどういう状況にあるのかということから、地域の子育て力というものを考えてみます。大戸先生もお話をしてくださいましたが、保育というものはもっと学校の中で教えられてよいと思っておりますので、

## 本日の講義の概要

### 1. いま、日本の家族の子育ては？

①子育ての危機 ②子ども達の育ちの問題

### 2. 今日の家族の特質と家族問題

### 3. 地域の子育て力は？

①共同体と子育て ②地域ネットワークの限界

### 4. 保育を学校でもっと教えよう

①子どもと触れ合う体験 ②世代間の交流

### 5. 子どもが大切にされる社会のために

この話を最後のほうでいたします。子どもと触れ合うという体験もさせたい、そして世代間が交流できるようになっていくといいなという話です。大きくは、子どもが大切にされる社会でありたいという願いを持って話をさせていただきます。

### 1. いま、日本の家族の子育ては？

早速ですが、いま日本の家族の子育ての状況というのを考えたときにいちばん最初に思いつきますのが、子どもが遺棄されるという話です。熊本で赤ちゃんポストを設置したら、生まれたばかりの赤ちゃんをポストの中に置いて、誰かに育ててほしいと思っている方たちが全国から来ているという話があります。また、悲しいのは虐待事件、死亡事件です。なんと2010年上半期の警察の発表では、児童虐待が過去最悪の181件という新聞記事がございました。2000年以降は年々増加しているのですね。報じられるのは一部であると思います。昨年は18人が死亡しています。0歳児がほとんどだということです。昨年でいちばん印象に残りますのが、大阪西区で桜子ちゃん3歳と楓ちゃん1歳の遺体がアパートの中で発見されて、23歳の母親の育児放棄による餓死とみられる、という事件でした。3月ごろから数ヶ月間育児放棄をしていたということ

## 1. いま、日本の家族の子育ては？

### ① 子育ての危機

- ・多発する子どもの遺棄、虐待、死亡事件  
2019年「子種習志苑」児童虐待事件16件  
高知市立中学校2020年自殺者4名増加、最多  
児童虐待が1,000人が死亡は2010年※

※ 大和山内いづみさん「おぼろげな記憶の中の、1歳の子供を虐待、亡くす母親の  
後悔と救済」と題して2018年刊

### ② 青少年による凶悪な事件

- ・無差別殺人事件、  
・青年による突然の痴行、コミュニケーションの取れない青年  
秋葉原事件、都本の大学生（スーパーのトイレで3歳女児の首を絞める）

⇒ 家族の子育て機能はどうなってしまったのか

す。昼夜問わず泣き声が出て、母親はときどき帰ってきているらしいけれど、ホステスの仕事の方が楽しくて、というような見出しの記事もございます。児童相談所の人が踏み込んで入れなかったという悲しい事件です。

児童虐待をインターネットで調べますと、虐待記録というものがズラッと、まるで忘れてはいけないというかのように、県ごとに年月ごとに並んでいます。初め、ここから典型的な事例を整理したりご紹介したりしようかと思ったのですが、悲しくなるほどつらい事件がたくさんありまして、手が見つけれませんでした。そこで印象的な事件だけ挙げてみたわけです。児童虐待事件こそ、子育て力がまさに危機に陥っているということなんです。もうひとつ、家族の子育ての機能が一体どうなっているのだろうかと考えさせられるのが、もう成長した少年、青年による無差別殺人事件というものが起こっていることです。青年による突然の痴行。この青年たちはコミュニケーションのとれない青年。例えば、秋葉原の事件とか、つい最近では大学生がスーパーのトイレで3歳の女児の首を絞めるというような事件がありました。周りの人はみな、そのようなことを起こすとは思っていませんでした。周りの人はみな、そのようなことをちゃんと育てられるようになっていのかどうかという子育て力の危機



(参考) 家庭の中で多発する暴力

- 親から子どもへの暴力  
(児童虐待・子殺し・一家心中・母子心中)
  - 夫から妻への暴力  
(ドメスティック・バイオレンス DV)
  - 子どもから親、祖父母への暴力  
(家庭内暴力、子どもによる親殺し)
- 「家族は怖い」(齋藤学)・家族の中で発生しやすい暴力・家族の中で学習される暴力

の問題が見えてきます。

参考までに申し上げますと、この虐待というのは親から子どもへの暴力ですね。他には、子殺しとか一家心中とか母子心中とか、子どもと一緒に殺されてしまうということがあります。家庭の中には夫から妻への暴力、いま話題になっておりますDVの問題もあります。昔、家庭内暴力というと、子どもから親へ暴力を振るう、あるいは祖父母へ暴力を振るうという事件でした。子どもによる親殺しなどです。精神科医の齋藤学さんは『家族は怖い』という本を書いていらっしやいますけれど、家庭の中で実は暴力はすごく発生しやすい。兄弟間の殺人事件もありますね。お医者さんの家族で弟が殺されたとか、お姉さんが殺されたとか。先ほどの青少年の事件の問題でもお話しましたが、コミュニケーション能力がどうも弱まってきていると思われまます。いじめの問題、引きこもりや自殺がどんどん低年齢化していくというようなことも起きています。いま、日本の青年は内向きだということで、留学志向が少なくなっていることが話題になったりしましたね。ハーバードに行く学生がどんどん減っているとか。また、国際水準の学力が低下しているとも言われますが、実は学力低下以上に問題なのは子どもたちの学校での学習意欲が低下しているのです。この学力低下は受験用教科を学校の中で重視さ

## 2. 今日の家族の特質と家族問題

1. 家族が小さくなっている
  - ー 世帯規模の縮小
2. 家族は労働の場所でなくなっている
  - ー 雇用者家族の増加

## ② 子ども達の育ちの問題

- コミュニケーション能力の弱まり
- いじめ、引きこもり、低年齢の自殺
- 内向き青年
- エリートスポーツ少年少女の育成
- 国際水準の学力低下 学習意欲の低下

⇒子ども達の育ちは危機にあるのではないが

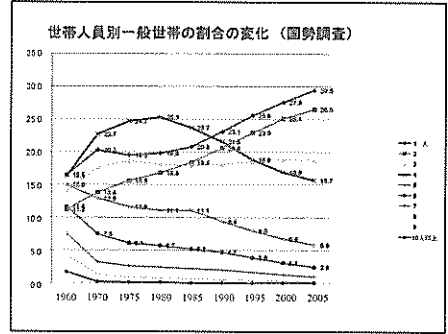
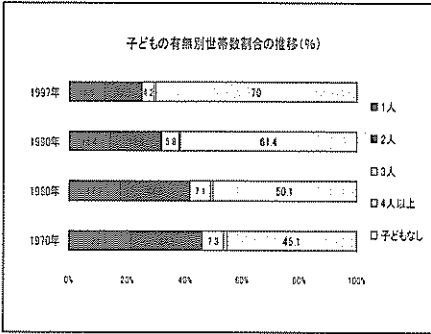
せることにつながっておりまして、英語を早くから習わせる親たちとか、加熱する子どもの教育という傾向も出てきています。一方で、引きこもり、せつかくいい学校に行っているのに閉じこもってしまうというようなことが起こってまいります。

子ども達の育ちが危機にあるのではないか、その背景に家族に問題があるのではないか、ということが考えられます。

## 2. 今日の家族の特質と家族問題

### (1) 世帯規模の縮小と雇用者家族の増加

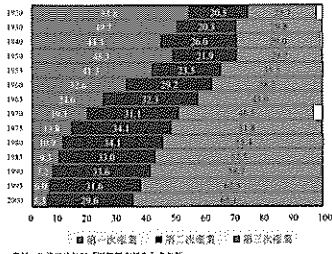
ここで、日本の家族の現状について全般的に取り上げてみたいのですが、何しろ家族が小さくなっています。小家族化ということなのですが、形の上で世帯規模が縮小している。そして、家族は生産労働の場所ではないということです。農業や商業工業など家の周辺で働いている人が多かった時代ではなく、雇用者として家庭の外で働く、父親も母親も雇用労働者になってきている。ちよつとここで考えてみたいのですが、家族というと4人家族を思い浮かべる人が多いのではないかと思います。正しくは「世帯人員」なのですが、これは平均世帯人員の変化を示すグラフです。4人というのはこの黒い数字で、1970年から85年くらい



までは確かに日本の世帯の中で4人世帯というのがいちばん多かったのですが、どんどん減少しています。いま、何人の世帯が多いかというと、1人世帯が29.5%で最も比率が高い。その次が2人世帯で、この2人世帯の伸び率が大いのです。これは子どもが巣立った老夫婦世帯や、若夫婦で子どもがいらないというような世帯が含まれています。かつて、たくさんの子どもの抱えていたような5人世帯、6人世帯以上は、合わせても10%以下と少なくなっていました。ついこの間、1960年代までは家族というのはかなり人数の多い人びとで成り立っていたのですね。それがもう本当に1人、2人ということになってきています。

ただ、子どもは一人では暮らせませんからどうなっているかということ、全世帯の中で子どもがいる世帯は、子どもの数が1人、2人、3人とこのようにどんどん減ってしまいました。1970年から次第に子どもがいらないという世帯が増えて、いま子どものいる世帯は全体の1/4ほどになっていきます。だから、多くの子どものいる世帯は全体の1/4ほどです。少子化ということで申し上げますと、女性は平均5人くらいの子どもの産んでいたという戦争前の状態から、戦後ベビーブーム期を経て一気に減少し、2005年には1.26人にまで減少しました。最近少し回復していますが、2009年には1.37でした。子どもの数が非

### 産業類型別就業人口割合の推移



資料：総務省統計局「国勢調査報告」各年報

### 少子化の進展 合計特殊出生率の変化

■ 1920年	5.24
■ 1930年	4.71
■ 1940年	4.11
■ 1950年	3.65
■ 1960年	2.00
■ 1970年	2.13
■ 1980年	1.75
■ 1990年	1.54
■ 2000年	1.36
■ 2005年	1.26
■ 2006年	1.32
■ 2007年	1.34
■ 2008年	1.37



常に少なくなってきたことは日本の大きな特徴です。

次に雇用者世帯の増加についてですが、1920年から2000年までの間に第二次、第三次産業の人たちが非常に増えております。農林漁業の第一次産業の世帯が50%以上だった時代から、5%にまで減少していき、雇用者として第二次、第三次産業の家庭と別の場所で働くという世帯が多くなっているということです。

### (2) 今日の家族の特質と子どもの人間形成

それでは、この2つの家族の特徴がどういうふうな子どもの人間形成に影響していくのでしょうか。子どもの数が減ってきておりまして、親の世代もきょうだいが2人か3人くらいですから、きょうだいと同時にいとこが少ないという子どもが増えています。昔、平均5人くらい子どもを産んでいたという時代には、父親のきょうだいが4人くらい、お母さんのきょうだいも4人くらいいるということで計算してみますと、その4人のおじさんおばさんたちのところに5人くらいずつ子どもがいれば、 $4 \times 5 = 20$  ずつで、父側、母側合わせて40人ものいとこがいた計算です。すごく年齢の高いところもいたし、自分と同じくらい、あるいは自分より下のところもいて、どこかで遊んだ経験があると思います。今ではいとこがないという大学生やいとこ遊んだことがないという

大人もいて、大きな変化が起こっていると云えます。お兄ちゃんにケンカでやられたとか、弟の面倒をみたとか、妹をかわいがるとか、そういうことができない。いとこと遊んで赤ちゃんの面倒をみてあげる、それもできません。おじさんおばさんが少なくなつて、いとこもいなくなつていくというのはとても大きな変化と思います。おじさんの家に行つて、ちよつと遠慮があるけれど赤の他人の家とも違うところと泊まつてみたりする。そうすることで、外へ出る機会のちよつと橋渡しになるような関係が作れて、不登校の子どもが回復していく、家族以外の人たちとのコミュニケーションの場が広がることを推奨している小児精神科のお医者さんもいらつしゃいます。これはとっても大事なことだと私も思います。子どもが生まれて間もなくのあいだ、非常に貧しい人間関係の中で育つ。物は豊かになりましたけれど、まさに貧しいと言つていい人間関係だと考えます。これがコミュニケーション能力を低下させているのです。

母と子の間だと、きちんとした言葉でしゃべらなくても通じてしまいます。これは、言葉を学習する0歳の最初の時期、そして1歳くらいに1語文2語文を覚えていくときに、母と子だけで、いとこもいない、おじさんもおばさんもない、お父さんもないような家族の中で過ごし

## 今日の家族の特質と子どもの人間形成

- 世帯規模の縮小
  - きょうだい、いとこの少ない子ども
  - ・母と子の平穏な関係
- 貧しい人間関係
- コミュニケーション能力の低下
- 雇用者家族の増加
  - 働く体験をしないで成長する子ども
  - 乳幼児、高齢者のケア体験の不足

ます。雇用者家族というものにはそういう特徴がありますよね。ご飯のときに子どもは母親に「みずー」と言うわけですよね。「水がどうしたの?」といちいち私はうるさく聞くのですけれど、「みずー、みずー」と。「お水ください」でしょ?」と言って、「お水ください」と言えたらあげることにしていたのですけれど。そして、あげると子どもはすぐ飲むうとしますから、「ちょっと待って。何て言うの?」と言って、「ありがとう」を親がいちいち教えないと、「お水ください」という日本語の表現や「ありがとう」と言うことができない。おばあちゃんがいったりお兄ちゃんがいれば、人に取ってもらったりしたときにはこう言うのよ、ということが自然に学習できますが。母と子だけの関係では面倒ですから、母親は子どもの気持ちを察して、水を黙って渡してしまいます。「してください」、「ありがとう」が言えないコミュニケーション能力の低下はどうしても起こりやすいのです。また、母親は「早く」とか「ダメ」とか自分の都合のための言葉しか言えないことが多くなります。さらに、雇用者家族になると働く体験をしないで子どもが成長します。農作業など家の中でいろいろな仕事をしていたときには、子どもは働かざるを得なかった。小さい子の世話をしたり、おじいちゃんおばあちゃん世話をしたり。そういう体験が全然なく育っていくのです。

## 母親達の育児不安の研究から(牧野)

### ■ 育児不安とは？

「子どもや子育てに対する蓄積された漠然とした恐れを含む情緒の状態」(新社会学事典)

### ■ 育児不安の測定

- 一般的疲労感
- 一般的気力の低下
- イライラの状態
- 育児不安指標
- 育児意欲の低下

### (3) 母親達の育児不安の研究から

これは先ほど大戸先生がご紹介くださったのですが、私は育児不安の研究をいろいろやっておりました。話すところだけで長くなってしまっているのですが、不安というものは悩みと違って、「漠然とした恐れを含む情緒の状態」と『新社会学辞典』にも書かれております。私が書いたのですけれども、かなり一般に使われるようになってまいりました。子育てというのは本当に疲れます。イライラしたり、不安を感じたり、意欲が低下したりします。学校の先生がこんな状態だったら、親は「困った先生だ」とすぐ異議を唱えると思いますけれども、24時間、発達の非常に著しい子どもが、疲労感・気力が低下してイライラしているような状態の親に育てられているというのは、非常に不幸ですね。泣き止まない子どもに思わず毛布をかけてしまい、気がついたら子どもが窒息死していたというようなことが起つたりします。調査項目その他は省略しますけれど、どういうときに母親の育児不安が強くなるのかということで、調査の結果このようなことが確かめられたという話を少しします。

お母さんの年齢が若いと育児不安が強いのではないかとか、あるいは歳をとってからの子どもの方が不安が強いのではないかとか、就労しているからとか、三世代ならいいけれど核家族だから不安になるのではな

## 母親達の育児不安は何によって強められるのか

- 母親の年齢
  - 母親の就労の有無
  - 家族形態 核家族か、三世大家族か
  - 子どもの数、子どもの年齢
  - 夫が子どもと遊ぶ時間
- いずれも育児不安との関係はナシ

いかとか、初めての子どもだと悩むんじゃないか、子どもが多いと大変なんじゃないかとか、いろいろ仮説を立てました。遊ぶ時間はどうかとか。調査の結果、これらはみな育児不安との関係はなかったのです。この後いろいろな方々が同じ調査をやってくださいって、多くの研究者が追跡でも確かめてくださいました。

では、何が育児不安と関係があったのでしょうか。「夫は育児への責任感がない」というときに、母親はたった一人で育児をしているという思いを持ちます。子育てに関して夫を頼ることはできないという思いを持つている人は育児不安が強くなるのです。もう一つ、育児不安と関係があったのは、ネットワークの狭さです。お母さんのつきあいが狭くて、「母子密着の育児」と言える状態です。母親は本当に一生懸命に育児をしていて、特に、子どもだけが生き甲斐であると感じていたりするような人。狭いネットワークの中で育児をしている場合に育児不安が強くなります。近所づきあいが少なくて、外に出る時間も少ない、つまり、子どもが小さいから外に出られないと思ってお母さんは多いですね。学習の場に行ったり、趣味をしたり、それはとんでもないことだと思っている場合です。それに加えて、夫を頼ることはできないというところで、夫の休日でも離れられないというようになりますと、



## 母親の育児不安に影響を与えるもの

- 父親の育児への責任感
  - \* 子育てに夫を頼ることは出来ない
  - \* 自分1人で育児をしている
- 母親のネットワークの狭さ
  - \* 母子密着の育児
    - 子どもだけが生き甲斐であると  
感じる
  - \* 近所つきあい／外に出る時間

お母さんは育児不安が強くなるということです。近所つきあいが狭く、先ほどの密室という家族の状態が不安を生み出し、だんだんに子どもに当たり散らしたりして、子どもを虐待するというようなことと紙一重になるのですね。最初、私が子殺しの研究を始めたときに、どうして母親が子どもを殺すというようなことをするのかということを見ていきましたら、母親役割をやめたいときに子殺しや心中が起こるということが分かかってきました。主役を取り代わってくれる人、交代してくれる人がいない、ずーっと子育てに関しては主役を演じ続けている母親が、主役をちよつと降りたい、やめたいというときに代わってくれる人がいないとき、どうするかというと、それは子どもがいなくなるか、自分がいなくなるか、ということになりますね。この交代してくれる人が見つからない、そういうところで虐待とか子殺しとか起ってくるということになります。

### (4) 家庭教育に関する国際比較調査から

ちよつと話が飛ぶのですが、2005年に私どもは6カ国の家庭教育に関する国際比較調査をいたしました。これはちよつと10年目の調査でもありまして、1994年が国際家族年で、当時の文部省が家庭教育の調査をしたということで日本・韓国・タイ・アメリカ・イギリス・ス

### 10年前と変わったこと、変わらないこと

- ・ 変わらない父親と子どもとの接触時間の短かさ、  
変わらない母親と子どもとの接触時間の長さ、  
父母の大きな差。・・・むしろ拡大
- ・ 子どもの世話をしつけない父親  
・・・変わらない
- ・ 母親任せの育児・子育て・・・変わらない



### 家庭教育に関する 国際比較調査 2005

(日本・韓国・タイ・アメリカ  
フランス・スウェーデン6カ国)

独立行政法人 国立女性教育会館



ウェーデンの6カ国の家庭教育の調査をいたしました。ちょうど10年経った2004年にもう一度同じ調査をしてほしいということで、このときは国立女性教育会館(NWEC)、ヌエックと呼んでいる機関が委託を受けて調査を行いました。そのデータをお出しすると長くなりますので、10年前と変わったこと、変わらなかったことだけを少しお話ししてみましたと思います。

子どもとの接触時間が短いという日本の父親の特徴は、6カ国中やはりいちばん少ない。これは10年前と同じで、日本はお父さんが家にくなくて子どもと接していないのです。労働時間は韓国が非常に長くて、日本と同じくらいなのですが、韓国のお父さんのほうがもう少し接している。それから、母親と子どもとの接触時間の長さは、日本は6カ国中いちばん長い。これは、大都市中都市小都市で調査をしておりますから、だいたい日本全体のサンプルとして言ってもいいものです。通勤時間は平均10分とか15分くらいですから、東京だけの大都市の調査結果ではないのです。これが本当に変わらなかった点ですね。父母の差の大きさは、10年の間でむしろ拡大しました。子どもの世話をしつけ、子どもの食事の世話をする父親は、6カ国中で最低の割合。10年間全然変わらなかったのですね。「母親任せの育児子育て」というものが10年間変わらない



ということですが。家族の中で母親一人が受け持っているという感じだと思えます。密室の中で母親が育児に不安を感じやすい。一人で主役を演じ続けているということで、子どもを育てるのは楽しいけど疲れる、ちよつと交代をしてほしいという様子が見えてきます。

### 3. 今地域の子育て力は

#### (1) 母親一人に集中する子育て責任

ちよつと今、私のところの孫が7ヶ月目に入りました。娘は結婚してから間もなく出産をしたのですが、狭いけれども我慢してしばらくここで過ごそうということで、新婚後も結局家を探しもしないで実家の近くに住んでいました。案の定、子どもが生まれてからはしよつちゅうしよつちゅう子どもを連れて「ちよつと見てて」と転がり込んできます。ちよつと夫も退職した後で、私も時間があるので、しよつちゅう子育て役割を引き受けています。「眠い、疲れた」と娘は実家に来てベッドに転がり込んで寝て、子どもは私が見ていて、おっぱいの時間になるとお母さん(娘)のところ連れて行くという状態です。外へ出るときにも、「頼む」と言ってきた、まあ見てあげられるからいいのですけれど。こういう場所があると、母親役割をちよつとでも降りられるわけで、娘は

### 3. いま、地域の子育て力は？

- 日本では、母親一人に子育てと責任が集中している
- 密室の中で、母親は育児に不安を感じやすい。子どもを育てることが楽しいという気持ちがない。
- 家族の孤立化、密室化は、父母による子どもの虐待を生むことがある。
- 地域のなかも乳幼児関連の施設、活動は母親仕様
- 地域に子連れ父親の姿が見えない

ありがたいさを実感しているのです。□では言いませんですけど。

家族の孤立化、密室化ということが虐待を生む可能性について先ほど取り上げました。最近では地域の中の乳幼児の施設や活動も活発になってまいりました。子どもを連れて遊びに行ける、誰か他の人の目のあるとというような子育て広場の活動が随分活発になってまいりまして、公共団体が子どもと母親と一緒に来られる場所というものを随分整備しています。ただ、0歳の子どもを連れていけるくらいの近い範囲でということろはそう多くはありません。「子育てのサロン」とか「広場」とか呼ばれているものが増えてきておりますが、その多くは「母親仕様」と言いますか、お母さんが子どもと一緒に連れてきてそこで過ごすという感じ、母と子のバック状態と言いますか、セットという部分は変わらないという感じですね。お父さんがなかなか見えないということが多くて、わざわざお父さん用に土曜日の時間帯を設けたりする広場など、そういう活動をしていないと、どうしてもお母さん同士の預け合いになる。要するに、日本では母親一人に子育てと責任が集中しています。これはどんなにお母さんが立派で、そして能力もあって趣味も広がっているんなことができる人であっても、子どもから見たら人間関係としては非常に貧しくて、ちょっと大きいお兄ちゃんにつきあう、ちょっと小さい年齢の人

とつきあう、うんと年齢の高いおじいさんおばあさんとつきあうということ学習できなくなっているのですね。

## (2) 子どもの豊かな育ちのために

そこで、子どもたちを豊かに育てるためにどうすればいいか。一つは母子関係を密着関係ではないようにする必要があること、乳児期から人と関わる力を育てる、お母さんにその力を持つてもらおうということが大事です。母と子のネットワークを広げる。子どもも同じくらいの年齢の子どもと遊ぶ機会を乳幼児期から持つということが、とても大事になってまいります。みなさんのお近くの子育て広場をご存知でしょうか。かなり広がってまいりました。昔の人は、「たった1人の子どもを育てるのにそんなにツライと言うのは贅沢だ」と思うかもしれませんが、家族が平均5人とか大勢の人が出入りをしていたような家族とは変わってきていて、昼間夫が仕事に出たら、本当に母と子だけになってしまうのです。まずは父親の子育て参加を進めなければいけません。父親が子どもと共に過ごす時間、そして活動をもっとたくさん持たないといけません。

先ほどの6カ国の調査の中で、日本のお父さんはその短い接触時間の中で何をしているかというと、「一緒にテレビを見る」とか「食事をす

## 子どもたちの豊かな育ちのために

- (1) 母子関係を開く  
乳児期からの、人と関わる力を育てる  
⇒ 子育て広場で、母も子どもネットワークを広げる
- (2) 父親の子育て参加を進める  
子どもと共に過ごす時間と活動をもっと  
地域の中に父親のネットワークを  
「わが子」を育てるから、みんなの子どもを育てるへ
- (3) 「みんなで子育て」の場とネットワークを  
異なる性、異なる年齢、異なる世代、さまざまな文化の人と  
接する経験を 浪山持つ

る」くらいで、活動するということがほとんどないのですね。「お風呂に入れる」も多いのと、あとは「一緒に寝る」くらいで、アメリカのお父さんは、いろいろな活動しています。0歳から12歳までの子どもを持つ親が対象だったのですが、子どもと一緒に趣味の活動をするとか、家事を教えるとか、一緒に家事をするとか、そういう活動を子どもと一緒にやっています。同じアジアでも、タイのお父さんなどは自営だったり、農業だったり、商業だったりしますから、子どもと一緒に仕事をするというのもありました。日本のお父さんは活動が大変貧弱です。自分の家の中だけでなくて、地域の中に父親のネットワークがもって持てる状況にならないといけません。お父さんというのは、しばしば子育てに熱心である人もいるのですが、自分の子どもだけに熱心。この子に何を教えるようかとか、どういう教育を受けさせたいかとか、実にわが子だけです。もともとお父さんというのは家庭の中に社会を持ち込むと言われていきますから、もっと社会的な視野で地域の子どもを、みんなの子どもを育てるといってお父さん特有の領域があつたはずではないかと思えます。「みんなで子育てをする」というふうを考える。家の中でお母さんとだけ過ごすのではなく、異なる年齢、異なる世代、さまざまな文化の人と接する経験をたくさん持たせたいと思います。

### 世代間交流（団塊世代の役割）

#### ■ 物言われぬ子どもたちに代わって

子どもを育てる環境となる  
子どもが育つ環境を作る

#### ■ 団塊世代のエネルギーを活用する

団塊世代が持つ経験、能力、技術を  
地域の子どもたちのために使う

団塊世代自身が新しい能力を育てる

### （3） 団塊世代の役割

団塊世代の人のために話を頼まれたときに申し上げていることなのですが、このまだまだ若い60代、70代の方々のエネルギーを活用して、経験、能力、技術を子どもたちのために使うということが必要なのではないかと思います。子育てを終えて会社の仕事も終わったような団塊世代のリタイアした人たちは、子どもにとっての環境となります。子どもにとって近所のおじさんおばさんという、存在していること自体が環境になるのです。最近リタイアされた方はおじいさんどころではなくお若いのですけれども、子どもが育つ環境づくりにも役割を果たせるのではないかと。閉じこもりたりして、家の中で何にもしないで過ごしている少年青年がいる、その人たちと一緒に地域の環境づくりをしていく。もっとこの地域を住みやすくしよう、より良くしようということのために、花壇づくりをしたり、地域の清掃をしたり、危険な場所を変えていくという活動をしている人たちがいます。そのことが実は団塊世代の新しい能力を育てるのです。

いろんな子育て支援が考えられます。お父さんもおじいさんも、我が子、我が孫の支援は自分でやることなのですが、グループで、そして組織で、もっと子育て支援をやるう！ と広げていかななくてはなら

乳幼児、高齢者が共に過ごし、共に生きることの楽しさ

- 異なる世代から学ぶ
- 人とかかわることの楽しさを知る
- 他人をケアする力を身につける

親になる前の「家庭科」の学習  
[乳幼児の発達と保育・福祉、  
高齢者の生活と福祉]

## いろいろな子育て支援

- 個人で わが子、わが孫の支援
- グループで 他人の家庭で、ファミリーサポート
- 組織で 保育園、幼稚園、学校で
- 地域全体で 子育て広場で、児童館で  
行政の場で、地域組織で、
- ITの全国ネットで 情報提供、相談、交流、

一時的活動 → 継続的活動 → 組織的活動

ないのではないでしょうか。地域全体で、行政の場、地域組織、学校などと連携して、もっと子育て支援をしていく。総合的な学習の時間に、地域の人たちが出て行って子どもたちにいろいろな物の作り方を教えてあげるとか、竹トンボを作ったり竹馬を作ったりして、昔の遊びを教えとるか、あやとりを教える、お手玉を教える、などいろいろな活動が展開されています。地域の子どもと地域の住民とが親しくなって、外で出会ったときに「こんにちは、この間はありがとう」なんて言えるような環境ができていくといいなと思うのですね。団塊の世代が駆使してきたお得意のインターネットなどの情報機器を使って交流や相談の役割も果たすことができるのではないのでしょうか。一時的な活動で援助することが継続させて組織的な活動に広げていくと、地域の子育て支援というものがもう少し活発にいくのではないかと思います。

## 4. 保育を学校でもっと教えよう

乳幼児や高齢者が共に過ごして、共に生きることの楽しさを学ぶことができるということは、非常に大事だと思っております。異なる世代から学ぶ、人と関わることの楽しさを知ったり、他人をケアする力を身につけたり、ということ。これが実は、私のもう一つの専門「家庭科教育



### 家庭科の中に幼児との触れ合いがある

- ・ 中学校「技術・家庭」家庭分野
- (2) 幼児の発達と家族について
  - ア 幼児の観察、遊び道具の製作
    - ー 幼児の遊びの意義を考える
  - イ 幼児の心身の発達の特徴を知り
    - ー 子どもが育つ環境としての家族の役割を考える
- (5) 幼児の生活と幼児とのふれあい
  - ア 幼児の生活に役立つものを作る
  - イ 幼児の心身の発達を考え、幼児との触れ合いやかかわり方の工夫ができる



### 4. 保育を学校でもっと教えよう

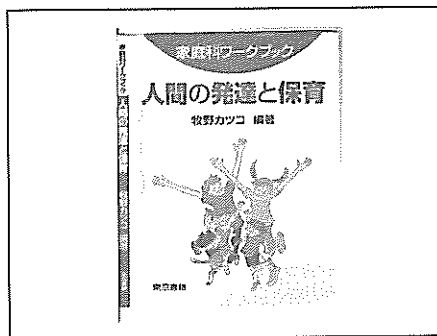
- ・ 高等学校家庭科「家庭総合」(男女共学)
- (2) 子どもの発達と保育・福祉
  - ア 子どもの発達
  - イ 親の役割と保育
  - ウ 子どもの福祉

(内容の取り扱い)(2)については、…学校家庭クラブ活動等との関連を図り、幼稚園や保育所等の乳幼児、近隣の小学校の低学年の児童等との触れ合いや交流の機会をもつよう努めること



「学」からの提案なのですが、家庭科の学習とつながっています。

家庭科には「保育」、「家族」という領域があります。高等学校の家庭科は1994年から男女共学になりました。共学で学んだ人たちが、いまようやく29歳になっています。これも国際家族年と同じ1994年からスタートしたのです。男女共学必修の最初の世代は29歳くらいになつたというところなのです。その中に、子どもの発達と保育・福祉という単元があります。学習指導要領の中に内容の取り扱いという項目があつて、この内容については、学校家庭クラブ活動等との関連を図り、「幼稚園や保育所等の乳幼児、近隣の小学校の低学年の児童等との触れ合いや交流の機会をもつよう努めること」ということが書かれているのです。中学校にも保育の領域は位置づいていて、これも男女共学で必修で必ずやることになっています。幼児の観察とか遊び道具の製作とか、発達の特徴を知る、などの内容です。中学生は、乳児ではなくて幼児から始まっているのですね。赤ちゃんではなくて幼児と触れ合いをなさいたいというものです。役立つものを作ったりして、幼児との触れ合いや関わり方の工夫ができるよう、実際に触れ合いなさい、という内容があるのです。家庭科が扱う保育というと、みなさんは違和感を感じるかもしれませんが。家庭科というと、被服製作とか調理実習というのを思い浮かべ



## 家庭科教育が扱う内容

- 家族…人間の生命の誕生する場  
生命の生産
- 生活…生きること、生きていくこと  
生命の再生産



る方々も多いと思います。特に男性、年配の方はそうだと思うのですが。家庭科は、家族と生活を扱う。家庭というのは家族の生活の場です。家族とは何かというと、人間の生命が誕生する場所が家族。基本的に子どもは命は家族の中で生まれます。だから、家庭科のいちばんの根本とというのは、人間の生命が生まれる家族の学習、保育の学習になります。そして、その生まれ出た生命が生きていること、生きていくことを扱う。生命が死んでしてしまわないように食べ物を与え、そして日々細胞を更新して生き続けていくということ、これが家庭科の内容そのものなのです。衣食住というのは、この生まれ出た生命が生き長らえるために必要な活動というわけです。今は学習指導要領や教科書などをご覧になると、家族や保育が最初のほうで大事に扱われております。

私はこの「保育」というのが、教師が教え込むだけの学習であっては困ると思うのです。『家庭科ワークブック』など、学習活動が活発に展開するような本を作っているのですが、その中でたとえば次のような活動を入れています。

自分の子どもが生まれた、名前をつけてあげよう。男の子だったら？女の子だったら？という活動です。「牧野カツコ」という名前はとつても嫌な名前です。お分かりでしょうか？戦争の時に生まれたということ

### 赤ちゃんの名前をつけよう

- ・自分の子どもが生まれた。名前を付けてあげよう
  - ・男の子だったら
  - ・女の子だったら  
その理由
- ・身近な人や有名な人で名前の由来を知っているものがあつたら、書いてみよう



がもう明明白白。でも、私と同じ世代で「勝利」（かつとし）さんという名前の方もいます。石坂浩二さんだって本名は「兵吉」さんというのですよ。名前にはそういうその時代の思いがこもっています。いまの私だったら、「ジュン」とか「ケイ」など、ジェンダーフリーの名前をつけたいですね。外国に行つて発音しやすいもの。「カツコ」はとっても発音しにくい。日本向けでも外国向けでも両方で嫌ですね。さあ、いろいろ理由をつけて名前つけをします。大学生でも喜んでつけるのですね。非常に素敵な、音がいいからとか、漢字がいいからとか、思いがこもっています。身近な人や有名な人の名前で由来しているものがあつたら書いてみよう、こういう学習をして、すべての子どもが、ひとり、ひとり、美しい名前を持つ大切な存在であることにまず気づきます。

次に紹介する活動はアメリカでされているもので、実際に経験した学生もいます。「もしあなたに赤ちゃんが生まれたら、親となったあなたは毎日赤ちゃんの世話をしなくてははいけません」と、生卵を赤ちゃんに見立てて、卵の赤ちゃんの世話を1週間続けてみるという活動です。実際、これは1週間も続けなくて3日くらいで十分です。そのあと食べたほうがいいので、夏は3日くらいにしたほうがいいと思います。卵1個にあなたが考えた名前をマジックで書いて、目をつけて、ちよつと前

### たまご赤ちゃんの世話をする

- ・もしもあなたに赤ちゃんが生まれたら、親となったあなたは、毎日赤ちゃんの世話をしなくてはならない。生卵を赤ちゃんに見立てて、赤ちゃんの世話を1週間続けてみよう。
- ・たまご1個にあなたが考えた名前をマジックで、書いておこう。
  - ・どこへ行くにも赤ちゃんを一緒に連れていこう。
  - ・さもなければ誰かに世話を頼むことが必要だ

・二人ずつペアになって2個の赤ちゃんの世話をしてみよう



の方に髪の毛なんかつけて。私も世話をしてみました。どこに行くにも生卵を持って行かなくてはいけない。タッパーの水の中に入れて冷やして学校に持ってくる子もいたり、ティッシュペーパーに何重にも包んで持ってきたり、うっかりして潰してしまった子もいるし、「面倒だから食べちゃった」なんて子もいて、いろいろ面白い。一緒に連れて行かなくてはならないから、体育の時間には「どうしよう」なんて言っただけ、「教室にまとめておこう」、「誰かが面倒見るために残ってなきや」とかがあつて、「保育所をつくつたらどうか」といろいろと考えてくれるのです。2人ずつペアになって2個の赤ちゃんの世話をしようという、こんな発展的な学習もできます。顔を書いて名前を書いて「○○ちゃん」と言っただけで歩くと、本当にいつも気にしてはいてはいけないといふことでね、3日くらい経って食べようと思つたときには、とっても胸が痛みます。卵を壊すのが。いつも自分と一緒にいなくてはいけない、目が離せないという経験をしてみて、親になるといふことの一部を学習することができます。

それから、とても大事な学習として、赤ちゃんとその保護者を学校に招待し、実際に赤ちゃんと接してみるといふ学習もあります。保育所や幼稚園に行つて接しなさいと先ほどの学習指導要領にも書いてあります

### 赤ちゃんを教室に招待しよう

- ・乳幼児についての学習を深めるために、赤ちゃんとその保護者を学校に招待し、実際に赤ちゃんと接してみよう。
- ・赤ちゃんについての確認  
名前、生年月日(何歳何ヶ月)
- ・実習の準備(安全への配慮 危険防止)
  - ・保護者にインタビューしたいこと
  - ・赤ちゃんをよく見て気がついたことを書こう



たけれども、いま、高校生40人のクラスの子が、小さな保育所や幼稚園でしたら園児が30人くらいしかいませんから、そんなに多くの人が来ると困るといふ幼稚園もありますので、学校に来てもらうのです。赤ちゃんについて事前に何歳何ヶ月の人か、安全配慮とか、こういうところに危ない物がついていないかとか、手をきれいに洗ってとか、いろいろと配慮を学習してから招きます。当日は保護者にインタビューしたいことや赤ちゃんをよく見て気がついたことなどを記録しておく。頭の上がピクピクしていたとか、握ってくれたら本当にやわらかい手だったとか、ほっぺがプヨプヨしているとか、とても新鮮な感想を書いてくれます。これは親と一緒に来てもらうので、何ヶ月の赤ちゃんでも頼むことによつて、月齢や年齢の異なる乳幼児と触れ合うことができます。

アメリカの高等学校では、在学中に妊娠した子どもの赤ちゃんを学校の家庭科の時間に連れてきてもらうつて、2ヶ月目、3ヶ月目、4ヶ月目の赤ちゃんの成長を見るところをしながら、2ヶ月目、3ヶ月目、4ヶ月目のお母さんもそのあと学校に復帰しやすくなる効果をもっていると言っています。日本だったら、在学中に妊娠して出産したなんていふたら、退学処分になるということもありますが、妊娠した子どもが学校を続けたいけるよう援助をしよう、学校に来る機会を増やそうという意味で、

そういう学習をしているところもあるのです。また、アメリカの高等学校では、調理室があるように保育室を持つている高校があります。ちょうど幼稚園の部屋がそのまま学校に来たような、子どもサイズのテーブル、椅子があつて、子どもサイズのトイレがお部屋の中にあつて上から危なくないか覗けるようになっていてというような保育室が、高等学校の中にあるのです。そして、地域の子どもが来て、そこでお兄さんやお姉さんに遊んでもらつてハロウインの準備をしたりというような学習をしているのですね。日本では、調理室や被服室があつても保育室はほとんど無いので、高校にも保育室が欲しいものです。

長崎県のある小学校で、校内で女児が友達を刺して殺してしまつたという事件がありました。事件をきっかけにのちのちの大切さを学ばせたいと、長崎のすべての高等学校の生徒は卒業するまでに赤ちゃんと接する機会を持つという、「子育て体感学習」というプロジェクトを全高校で実施しているのです。乳幼児学級に来ているお母さんを振り分けて高校に行つてもらおう。1組の親子が来るだけじゃなくて、数人のお母さんたちが母校に行つたりするのですね。お母さん同士も、同じくらいの子どもを連れて何組かで訪問できますから、お母さん同士も親しくなる。それから、高校生も喜ぶ。お母さんたちには謝金は出なくて、保険だけか

## 家庭科の保育学習のわらい

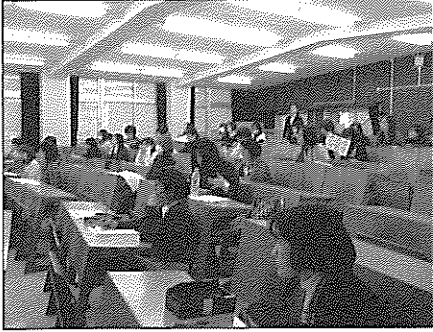
・ 乳幼児を直接に、実際に知る

- ・ → 自分自身の発達を知る
  - ・ → 人間の発達のすばらしさを知る
  - ・ → 一人一人の違いを知る
  - ・ → 子どもをかわいいと感じる
  - ・ → 子どもといると楽しいと感じる
  - ・ → 子どもと楽しく遊ぶことができる
- 人間の可能性の大きさを知る



けているのですが、交通費もナシでも、「今度またいつですか?」「また来たい!」と言うお母さんたちが多いそうです。

そして、赤ちゃんを抱いたり世話をしたりという、赤ちゃんを抱く経験をさせてみるということで、乳幼児を直接、実際に知る。その中で自分自身の発達も知る。こんな小さいときもあつたんだなあ、大きい男子高校生もこういうときがあつたんだなあということが分かる。人間の発達の素晴らしさを知って、子どもがかわいいなあと思う。赤ちゃんには人間を優しくさせる力があるのですね。子どもがいると楽しいと感じる、これはいろいろな研究で、子どもと接すると子どもがかわいいと感じられるようになるという結果があります。接しないと、うるさいとか煩わしいとか思うのですね。よく「泣かせてばかりいてうるさい!」とか「少し外に出てくれ」とか言うお父さんがいますが、世話をしていないからなのです。いま、父親たちも大分変わって来ています。最近の新聞ですけれども、「家庭科熱い男子校」という記事があつて、餃子実習、子育て体験なんていう学習の紹介を行っています。それから、「パパママ体験、中学生に自信」という記事もあります。麻布高校とか筑波大附属高校などの進学校でもやっています。家庭科の先生に言わせると、将来世の中の重要なポストに就く人ほど、子どもや家族・福祉の学習をし



っかりしておいてほしいということなのです。

これは、お借りしたパワーポイントですけれども、幼稚園、保育所に保育体験学習に行っています。お兄ちゃんの背中に乗せてもらうと子どもたちもすごく喜んで、保育園の中に普通あまり男の先生がいないことが多いので、とってもいい体験をするという例です。

## 5. 子どもが大切にされる社会のために

子どもが大切にされる社会をつくるためには、すべての人が「子ども」というものかわいいと思ひ、大切だと思えるようにしたい。お茶の水女子大学には、いずみナーサリーがあります。この保育室をつくる運動を立ち上げる仕事を、大学の先生方と一緒に私もやってまいりました。大学の中に保育所など必要はないと言う人もいましたが、自分自身が保育所探しに苦労した年配の先生、同世代の人たちが「どうしてもつくろう」と手をあげました。ちょうど私のゼミに、在学中に妊娠と出産を経験した人が2人いたのですね。1人はお腹がこんな大きいときに、附属中学校で実習をさせていただきました。教員免許状を取って卒業したのです。その子たちがゼミの時間に赤ちゃんを連れて来てくれたのですね。そのときに、私の部屋にはオムツを替える場所もなかったのです。



## 5. 子どもが大切にされる社会のために

大学の中に保育室を作る運動を通して

- 大学の中に赤ちゃんがいる →
- 大学の中で赤ちゃんが育つ →
- 「世界の中心で赤ん坊が笑う」  
(本田和子元学長)
- すべての中心で赤ん坊が笑っているように、日本に！ 世界に！

大きいテーブルの上で替えてもらったりしたのですが、授乳の場所もない。これは女子大としてすごくおかしいと思って、保育所づくりにはずみがつきました。やっぱり大学に保育のための部屋があつていいのではないかと。ちょうどそのときにお茶大の佐藤保学長先生が、国立大学の男女共同参画委員会の座長をしていらつしゃつたということもあつて、他の大学に保育室はどのくらいあるのだろうと調査をされました。医学部のある大学は、看護師さんのために持っているんですね。それは1960年代につくられた保育所で、それ以降は全然増えていませんでした。お茶大の中に実際につくるには本田和子学長先生が貢献してくださいました。昔は反対が多かつたのですよ、「大学で赤ん坊の泣き声がある、なんだ！」と言う偉い先生がおられたのです、という話を本田先生から伺いました。本田先生は、「大学の中に赤ちゃんいるということが大事だ」と。「知の中心である大学の中に赤ん坊をおくこと、それが大学の使命につながります」と言われました。そして、私たちは大学に「赤ちゃんがいる」場所をつくって、「赤ちゃんが育つ」場所にしていきます。いずみナーサリーが南門右手に独立の建物としてつくられた時、本田先生は学長を終えられたところでしたけど、「『世界の中心で赤ん坊が笑う』という、そういう社会に」と言ってくださいました。そのこと

### 市場経済原理と子育て原理の基本的な対立

高い生産性(能率と効率)	低い生産性(非能率/非効率)
速い	遅い
大量の	一人の
合理的	非合理的
人工的	自然の

市場経済原理から排除される“子ども”  
自立した大人論からも排除される“子ども”

cf 中西正司、上野千鶴子「当事者主義」

権力関係において圧倒的な弱者である子どもの不在

を心に留め、本当に子どもは、すべての中心で赤ん坊が笑っているような日本に、世界にしていかなければいけないあとを思っているのです。

最後に、大急ぎで余計なことをつけ加えます。日本は本当に生産性、能率効率を求めて、今でも経済発展、経済成長。まさに経済原理はこちらなのです。子育て・子どもというものは低い生産性、非能率、非効率は、本当に何もかも遅い。だいたい妊婦は、労働力としては質の低い労働力と考えられていますよね。子どもというのもそう。大量生産の生産活動をすれば、能率が上がり効率が上がる。子ども・子育ては一人ずつの子どもに合わせます。一斉にミルクを機械で飲ませるなんて牛ではあるまいしできない。経済活動は合理性を追求しますが、子どもの世界は非合理的です。こちらは人工的で、子どもは自然の存在。市場経済原理を追求していくと、早いほうがいい、何でも大きいほうがいい、素早い、合理的であるのいいとなります。子どもは排除されます。「障害者論理」、「当事者論理」を中西さん、上野さんが岩波新書で主張しておられますけれども（中西正司・上野千鶴子著『当事者主権』岩波新書、2003）、大人の自立として障がい者が論じられるときにも、子どもはやはり当事者ではなく、発言できないから排除されていると思います。権力関係において圧倒的に子どもは弱者です。その子どもが不在である

- 「子育てというのは、両親だけにまかせてはおけない重要な仕事であると考えられている社会において子どもは一番良く育つ」

(ステファニー・クーンツ『家族という神話』)

ご静聴有り難うございました

“社会の中心に赤ん坊をおく”ことができるか？

ケアされる権利のみを持つ依存的な存在。  
弱い、小さい、予測不能の動きをする  
生命力にあふれた、未来のある存在。

“赤ん坊”の権利を「人権」の基礎とする社会を可能とするために、“家庭科の保育の学習”が、役割を果たすことができるだろう。

と、子どもも障がい者も高齢者も大切にされません。子どもが中心になる社会にならなければいけません。

子どもは、ケアされる権利のみを持つ依存的な存在です。当事者ではない、声を出さない、そして虐待され命を奪われていくだけである。弱い、小さい、予測不能の動きをする、だけど、生命力にあふれた、未来のある存在です。この赤ん坊の権利を人権の基礎とする社会を可能とするために、家庭科の保育の学習というものがその役割を果たすことができるのではないか、男女共学の家庭科を大事にしなければと思っっています。家庭科はどんどん時間が削減されてしまっていて、体験をする時間がないような科目になっていのですけれども、可能性を持っています。最後に、いつも引用しているのですけれど、ステファニー・クーンツというアメリカの家族史学者の言葉をお伝えします。

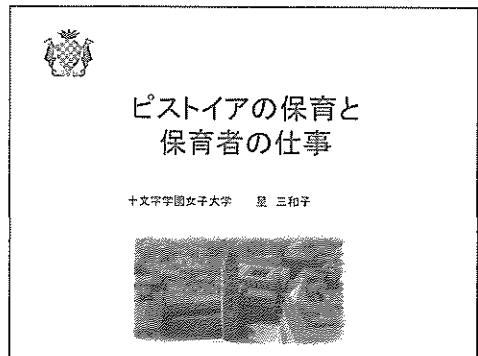
「子育てというものは、両親だけに任せてはおけない重要な仕事であると考えられている社会において、子どもはいちばんよく育つ」

それでは、これで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。



【星 三和子氏 講演】

フランス・イタリアにおける子育て力育成の現状



最初に状況を申しますと、地震以来、私はまだ家に帰っておりません。ほら、ひどい状態になっていますでしょう。着の身着のままの、頭はぼーっとし、髪はバサバサ、化粧道具はナシみたいな。私は毎月保育園に観察に行っていますので、一昨日も観察のビデオカメラを持って向かう途中に、東京の地下鉄の中で地震に遭ってそのままです。私は住まいが茨城県の筑波なものですから。本来、筑波まで交通手段が3つあるのですよ、バスと電車が2つ。けれども、3つとも使えない。ようやく今日使えて帰ることができればいいなという状態にいます。

フランスの保育の実践と日本の実践についてですが、ここでの保育の実践というのは、子どもの社会化過程、発達過程の研究を実証的に行っているということです。もともとそうした研究をしていました。その中でいろいろな経緯があつて、私はいろいろな人たちと知り合うことができました。フランスのパリというところはさまざまな国から人が集まってきました。イタリアの人もいれば、ブラジルの人もいます。その中でイタリアの人で、ずいぶん昔から仲良しの人がいまして、その人を通じて知った「ピストイア」という町があります。ヨーロッパの人たちが、前々から「ピストイアの保育はいいよ」という話をしていましたが、



とても小さい町なので実際にはあまり知られていません。「レッジョ」は非常によく知られています。ときどき「レッジョはなかなか難しいから、ピストイアでもいいよ」と言われますが、いえいえ、「でも」などというところではありませんよ、と言いたくなるようなとてもユニークな保育を実践しているところです。ユニークと言いますか、楽しいと言いますか。ピストイアに3回は行ったでしょうか。一度、十文字学園女子大学で保育学会を開催したときに、国際ワークショップでしたか、フォーラムでしたか、その方に講演をしていただきました。そうしたこともあり、いろいろなことでつながりができ、少しずつ詳しく知ることができるようになりました。その非常にユニークなところをぜひ紹介したい、というのが今日の最初の主旨です。

村山先生の保育と牧野先生の子育て支援ということで、フランスとイタリアの両保育と両子育て支援についてお話ししようかとチャットと想ったのですが、時間の関係もあり、ピストイアの保育とフランスの子育て支援の2本立てでお話をして、最後に子育て支援のフィルムをお見せしようと思います。会場にいる同僚の上垣内先生にも手伝っていただきますよう。

### イタリアの乳幼児教育サービス: 幼児学校は3-6歳児

- 子どもの97%
- 70% が公立(国立、公立)
- 月一金、8時30分～16時30分
- 教師/子ども比率:  
半日につき、1:25
- 幼児教育者養成は大学で4年間
- 職場研修は義務



### 1. イタリアの保育制度

- 0～3歳:保育園 asilo nido 国全体では利用率は7%だが、地方によって大きな差。
- 3歳から6歳:「幼児学校」(scuola dell'infanzia). 公立75%、私立25%。無償。
- 地方分権が強く、自治体はかなり自由に決められる。



その前に簡単にですが、イタリアの保育の制度をみなさんのご理解のためにご説明しますと、0歳から3歳と3歳から6歳に分かれています。0歳から3歳が保育園、3歳から6歳が幼稚園です。一応、「幼児学校」という学校組織ですね。しかし、国のそういう大きい枠組みはありませんが、地方分権が強く、かなり自治体が自由にできる仕組みになっています。今ここにある写真は手前が保育園で隣が幼児学校です。同じ建物で、建物続きになっています。幼児学校はほとんどが公立です。月曜日から金曜日で8時半から4時半まで開いています。実際はもっと早く子どもは帰ってしまいますけれど。教師と子どもの比率は1対25ですが、実際はもっと少ない。これは国の基準ですから、ピストイアの基準はもっと少ないです。保育者は大学で4年間の養成を受けた者であり、かつ職場研修が義務付けられています。この2枚の写真はいずれもピストイアの幼児学校、幼稚園の1コマです。

それから、保育園のほうはこちらもやはりほとんどが公立で、同じく月曜日から金曜日で4時半か6時くらいまで開いていますけれど、ピストイアの場合はかなりたくさんの子どもの子どもたちがお昼寝前にいったん家に帰って行って、お昼寝が終わった頃にまた戻るということです。これは後ほど事情をご説明します。保育者と子どもの比率はスライドにお示



## 2. ピストイア市と子ども施設の概要

- ・フィレンツェから電車で30分、人口9万人の中都市
- ・産業：車両製造、観賞用植木
- ・中世からの古い町。市場が立つ。
- ・古い市街は保護地区。
- ・三世代が近所に暮らす。
- ・イタリアは地方分権が強い。教育・福祉など、地方の裁量が大き



## 0～3歳児のための保育園

- ・当該年齢児の10%（地方によって差）
- ・大部分が公立
- ・時間：月～金 7-9 a.m. to 4,30-6 p.m.
- ・保育者/子ども比率：  
1/4：0-12月、  
1/7-8：12-24月、  
1/8-10：24-36月
- ・保育者養成：大学で3年間
- ・職場研修義務
- ・教育コーディネータの存在



ししたようになっていきます。そして、保育者は大学で3年間養成を受けるとあります。これは比較的最近こうなりました。職場研修もあります。コーディネーターについても後ほどご説明しましょう。

ピストイアという町は、フィレンツェの、ここにある地図の薄く青くなっている部分で、フィレンツェのちよつと左斜め上の位置にあり、フィレンツェから鉄道で30分くらい行つたところにあります。人口は9万人ですから、日本で言うどれくらいでしょうか、そんなに大きくない町です。車両産業でもつています。観賞用植木作りも盛んですが、そちらの人たちによると、観賞用植木は農業なので、農業は日本と同様に税率がすごく低く、車両産業では市税はたくさん入るけれど、植木では入らないと文句を言っていました。非常に古い町で、市場が紀元1000年以來、1000年間毎週立っていて、こんなふうにそこで買物をしていきます。古い市街は住民以外は車が入れないように、保護地区になっているところとあります。

次に移りますけれども、ピストイアの市の乳幼児政策はこのようになっていきます。1971年に国の保育所設置法ができて、そのときに保育所が自治体の管轄になりました。ピストイアでもそれに従って保育所をつくつたのですけれども、そのときに保育所と幼児学校を一括した管轄

## 保育と教育の自治体組織での統合 (市HPから)

### 4つの局の一つ

Area 3 - Servizi alla persona (人的サービス局)

・Servizio - Educazione e formazione (教育と養成サービス)

#### UNITA' OPERATIVE

- Asili nido e servizi integr. per l'infanzia (保育所)
- Scuola dell'infanzia (幼児学校)
- Laboratori di didattica (ラボ、アトリエ)
- Servizi tecnici del diritto allo studio
- Educazione degli adulti (成人教育)
- Progetti educativi e Università (大学教育)

## ピストイア市の乳幼児政策

(Galardini, 2008)

- ・1971: 保育所設置法(1044号法)。保育所が自治体管轄に。
- ・ピストイア市でも保育所と幼児学校に。市の教育局が両者を一括管轄。  
北イタリアの数ヶ所の都市との連携。  
子ども施設を一体化して建設＝協同が容易。
- ・1996: 「教育都市、子どもと青少年にやさしいピストイア」プロジェクト
- ・2005: 「教育憲章」策定。町全体が子どもの教育のための資源を構成し、市民が責任を負う。(Iozzelli, 2007)

にしました。このことについては次の画面で行政の仕組みをご説明します。そして、レッジオを含むイタリアの数ヶ所の都市との連携を、ミラノであるとか、モデナであるとかいう北イタリアの町との提携を進めています。子どもの施設をなるべく一体化して同じ場所につくるということとで、さまざまなことで経費も削減し、協同も容易にしています。96年には、「教育都市、子どもと青少年に優しいピストイア」というプロジェクトを立ち上げまして、子どもに優しい町宣言というものを出しました。2005年には市独自の教育憲章も作っています。このように非常に乳幼児政策に力を入れて、子どもに優しい町にしようとしている。これも今の市長が2期連続でやっているそうですけれども、その前の市長の時代からずっと進めているそうです。市の行政としては大きな4つの部局のうちの1つ、「人的サービス局」という中に、教育と養成サービスというものがあり、そこは保育所と幼児学校と、それから「ラボアトリエ」とあるのは児童館ですね、児童館と成人教育の場、大学教育が、すべて市の同じ行政の管轄の中に入っています。これが非常に大きな特徴ですし、一貫した教育ができるための基礎となっています。

それでは、保育所と幼児学校についてお話をしていきます。まず、

## Scuole dell'infanzia 幼児学校

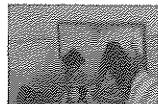
- ・ 教育施設。集団での遊びや自発的な遊びを通して充実した日々を生きる。
- ・ よい環境、質の高い空間の提供に努力。自己をやり表現し能力を発揮できる条件を促す。
- ・ 子どもの生活の複雑さや多様な関係を理解し、硬い週間スケジュールを作らない。子どもの要求を尊重。心地よい雰囲気を作ることに配慮。



## Asili nido e servizi integr. per la prima infanzia (乳幼児期対象の保育所と統合サービス)

### ・ Asilo Nido(保育所) :

「教育、成長とウェルビーイングを促す場。子どもの教育とケアの使命をもつ家庭を援助する場。すべての子どもに開かれている。子どものイメージは有能で、周囲の世界や人々と積極的に関わり対話する存在。そのための方策と空間を作り、よい教育的実践をする。」



保育所について、市の文書、公文書の中にある定義です。日本で言うところ、まず「保育に欠ける子ども、児童」ということから入るのですけれども、そうではなくて、「教育、成長とウェルビーイングを促す場」であるとしていきます。子どもの教育とケアの使命を持つ家庭を援助する場、すべての子どもに開かれている場であると。保育所ですよ。保育所というのは日本でしたら働いている人のためですよ。しかし、すべての子どもに開かれている。子どもは「有能で、周囲の世界や人々と積極的に関わり対話する存在」であり、保育所はそのための方策と空間をつくり、よい教育的実践をする場である、とこの定義の中に書かれています。こういうスタンス、こういう姿勢で保育所がつくられているということですよ。

一方で、幼児学校、つまり幼稚園ですね、これは教育施設であって、「集団での遊びや自発的な遊びを通して、充実した日々を送るための場」であるとしています。良い環境、質の高い空間の提供に努力をする。自己をつくり、表現し、能力を発揮できる条件を促す場であるということ。そして、子どもの生活の複雑さや多様な環境を理解し、堅い習慣スケジュールを作らない、と書かれています。これは公的な文書ではないのですけれども、ピストイアの行政の方の作った論文の中に書かれている言葉です。子どもの要求を尊重する、心地よい雰囲気をつくることに配慮

する、このような教育的な意義が書かれています。

それから、一つ特徴的なのが児童館です。児童館はこの町に4つあります。普通の児童館と少し違うところは、いわば専門別、分野別といいますか、仕事別になっているということです。色で名前がついているのですけれども、最初に「アレアバンビーニ」。4つにみな「バンビーニ」はつきます。「アレアジャール」、この「ジャール」というのは黄色という意味なのですが、これはお話とか演劇とか本に特化した活動なので、ね。この前ここへ行きましたけれども、小さい舞台がいくつあったり、お話の世界が展開できるような部屋があったり、あるいは靴の箱で子どもが工作を作って、そこでペープサートみたいに演劇ができたり、子どもが小さい舞台を作ってお話が展開できたりするような、そんなさまざまな活動をしています。そして、「アレブルー」というのは美術、造形に特化したところです。この写真は「アレブルー」の写真です。そこで子どもたちが美術に関するいろいろな活動をするところです。それから「アレベルデ」というのは自然をテーマにした児童館で、生物から天文から本場にいろいろなことの活動をします。科学好き少年がそのままおじさんになったようなおじさんが1人いて、いろんなアイデアを持っていて、昆虫を捕る道具を手作りしたり、プラネタリウムも手作りで傘で

## Area Bambini(児童館)

(1900年代創設)

Area Bambini Gialle :本、お話、演劇  
Area Blu :美術、造形  
Area Verde:自然  
Area Rossa:乳幼児親子、子育て支援

「市の子どものための場所。子どもたち、親たちの出会いと交流。豊かな活動を通して子どもたちがさまざまな考えを共有。多様な市民(専門家)による。」  
(学校や保育園から利用。放課後(午後)は子どもや親を受け入れ)



作ってみたい、もちろん図鑑や標本などもたくさんあって、それら子どもにも提供していて、子どもたちがそこに集まってきて活動できるということですね。それから、「アレロツサ」、赤い、つまり「レッド」ですけども、この「アレロツサ」というところだけは別で、いわゆる子育て支援の場になっています。小さい子どものためのスペースです。その上の3つは、学齢でいっても小さい子ども、3歳くらいから小学校、中学校くらいになるまで、どんな子どもも利用しようと思えば利用できるという施設です。逆に言うと、学校や幼稚園など、いろいろなところがここに来て、ここを利用できる施設でもあります。市の子どものための場所であり、子どもたち、親たちの出会いと交流の場であり、豊かな活動を通して子どもがさまざまな考えを共有する場であって、多様な市民や専門家の参加による施設というように定義されています。

こうしたいろいろな機関があるわけですけれども、それが単にバラバラにあるだけではなく連携をしています。一つ、連携の例としてお話ししますが、これは今回上垣内先生と一緒に訪問しインタビューをしたのですが、今の「アレブルー」という美術に特化した児童館と幼稚園がどういふふうに提携しているかということのプロセスです。まず市の行政の場合です。行政の教育養成サービスの専門家、すなわちコディ

## 児童館と幼児学校の連携プロジェクト

### ・ Area Bluの実践(美術)

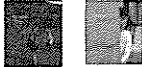
市の教育・養成サービス局が、幼児学校と児童館共同の年間プロジェクトのテーマを決める

⇒前年度に幼児学校に呼びかけ参加校を募集。

⇒4校(各1クラス)が協議の上選ばれる。前年1年間そのクラスの担任たちと児童館共同の計画作り

⇒各校3ヶ月1コースで、共同活動。子どもは児童館や美術館、他の場所で活動。教師と児童館は頻繁な協働。

⇒活動の成果を公表



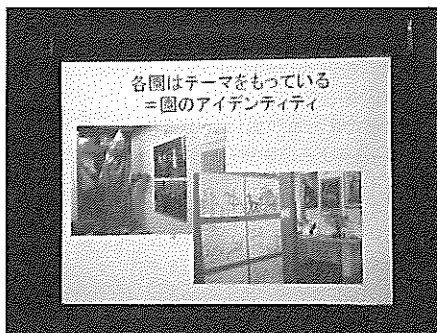
ネーターが、年間プロジェクトのテーマを決めます。現場ではなく上のほうで年間プロジェクトを決める。例えば、昨年でしたか、「自然」というテーマを決めて、幼児学校にそのプロジェクトに参加したい園を募る。制限はありますから、4園というように募集します。それで応募されます。その応募の中から4校選び、そして各校1クラスずつが選ばれます。選んだその年に、先生たちとこの「アレブルー」の児童館の先生が何度も協議をし、1年間通してプロジェクトを作っていきます。そして、その次の年度に各校3ヶ月1コースで、その児童館と学校共同の活動をしていく。子どもたちがその児童館にやってきて、先生と児童館の人が一緒に作ったプロジェクトを実行する。あるいは、町の美術館に行ったり、町を散策したり、といろいろな活動をする。そうした協同プロジェクトを持つているということです。さらに、その成果を公表します。資料の、いちばん下にありますが公刊されている2冊の本です。非常に立派な本ですけれども、スポンサーを得て本を作るといこともしています。

次に、一貫した教育ということがあります。ですので、0歳から3歳、3歳から6歳という分かれたものではなく、0歳から6歳まで一貫した

### 3. 0~6歳までの保育の目指すこと

- (1) 地域に開かれた保育
- (2) 保育者の専門職としての成長を促すこと
- (3) 子どもとその家族を暖かく受け入れること
- (4) 子どもの学ぶ権利を守ること
- (5) 子どもの美的感覚を培うこと
- (6) ドキュメンテーションの重要性
- (7) 家庭の参加を促進すること

保育をしようという市の方針で目的が作られています。それがこの7つですね。この7つは市の行政のトップの、現実的なトップの方が紹介された、日本保育学会のときにも紹介された7つの項目です。「地域に開かれた保育であること」、「保育者の専門職としての成長を促すこと」、「家庭を温かく受け入れること」、「学ぶ権利を守ること」、「子どもの美的感覚を培うこと」、「ドキュメンテーションを尊重すること」、「家庭の参加を促進すること」、これらは非常に大きなことです。ちょっと実際の様子を写真で見ただきたいと思います。すごくきれいなのです。これは、ある保育園の、上が0歳児クラスの部屋、下が1歳児クラスの部屋ですけれども、色彩がきれいでしよう。それから素材が、いわゆる「おもちゃ」がない。抽象的な素材であったり、こういう楽器みたいなものもありますけれども、本もたくさんあります。何でも遊び素材になるのです。どんなふうにも遊べるという抽象的な素材を多く使っています。こんなものも、遊びなのでしようかね。装飾でもあり遊びでもある。鏡が多用されています。例えば、こういう筒であるとか、ここにビーズみたいな、碁石みたいなものもあるのですけど、そういうあらゆるものが遊びの素材になります。これは「ごっこ部屋」で、逆にとてもリアルなごっこ部屋が用意されていました。素材はこのように段ボールあ



### 保育園の様子0～3歳

- ・ 美的な環境作り  
色、光、影、配置、よいものであること
- ・ 玩具でなく素材  
いろいろなイマジネーションを引き出す  
決まった使い方でなく創意工夫ができる  
素材や形の性質を知る、認知発達への促し
- ・ 保育園のテーマ、各クラスのテーマ  
例：自分を知る、想像する

り、紐あり、ペットボトルあり、これは何でしょうか、葉っぱあり、種あり、筒あり、卵を入れるポコポコしたものあり、何かの切れっ端あり、もう何でも。楽しいのかなーとも思うのですけど、それをこう、入れたり通したりして子どもたちは遊んでいました。これは1歳児クラスで先日撮ってきたものです。

幼稚園も同じように一貫しているのですが、園それぞれにテーマがあるというのでも大きな特徴です。アイデンティティがあります。例えば、この園は「お話」がテーマの園です。入り口にこのような妖精がいて、これが園のシンボルで、このシンボルを巡っているいろいろな活動を展開します。この町に伝わる伝説やお話を伝えたり、自分たちでそれを演劇のようにしてみたりというようなこともします。また、この幼稚園は名前が「マリノ・マリーニ」というのですけども、彫刻家の名前で、その彫刻家は馬を主な素材にしていたという非常に有名な人で、この園では「馬」がテーマになっています。いろいろなところで馬が描かれていたり、馬についての話であったり、馬についての彫刻であったり、素材であったりということがあります。それから、「自然」をテーマにしている園もあります。こんなふうに園のアイデンティティで自分たちがそのテーマを追究すること、それだけ時間を使えば他にあまりやることにな



## 幼稚園の様子

- 素材の吟味、多様な素材
- 美的な環境作り
- 子どもの経験と発想を生かした保育
- 園のテーマ、それを具現化したシンボラスコット(馬、竜、妖精)＝アイデンティティを作る …
- 教員それぞれが作る環境：得意なことをクラスで発展する。  
物語、本、絵、自然素材、香り、科学…
- ホリスティックな教育(人格全体の教育)

いとも思うのですけれども、それは構わないのですね。いろいろなことを広くやるのではなくて、一つのテーマをどんどんどんどん追究していくということが基本的な路線になっています。

そして、やはり造形。これも本当に自由な子どもの発想と、子どものちょっとした発見であるとか、子どもが持ってきたことに触発されてどんどん遊びを展開するということの、いくつかの例ですね。これは、積み木がただ置いてあるように見えますが、「風景、景色」というのがこのでのテーマで、景色を表現してみようと絵を描いたのです。けれども、その絵だけでは子どもたちがおもしろくないので、さらに自分たちでこうして筒を横にずーっと並べて、その風景に地図を展開していったというものです。さらにはみ出してずっと作るのですけれども、そうやって子どもたち自身が展開していくのです。これは何だかよく分からないのですが、粘土に貝殻をはめ込んで、これも誰かが親にプレゼントすると言い出して、それからみんなまで発展して作っていった。こうやって廃材も何でも素材になっています。壊れたアイロンも紐で吊すと、なかなかこれは紐で吊すといっても簡単ではないのですよ、バランスもとらなくてはいけないのですよ、と先生が説明されましたが、そういうことも考えながら、一つ作ったら立派なオブジェというように、麗々しく飾ってあ

るのですね。こんなふういろいろなものを合わせて人のかたちを自分なりに作って表現してみたり、絵を描いたものを〇□△で壁や天井に映して楽しんだりしているということです。これは「木」のテーマの幼稚園です。いろいろなところに出かけて行って木を見ました、大きな木がいっぱいありました、それを今度は自分たちで作ってみましょう、と。写真がとも入りきらないのですが、天井まで届く木を作るといようなこともやっていました。鳥が飛んできました、と言えば、鳥がいっぱいいるところに巣箱も作りたい。巣箱を作るにあたってお父さんやお母さんがいろいろな資料を持ってきてくれた。本物の巣を持ってきてくれるお父さんもいた。それで巣箱を掛けたのだけれども鳥が入ってくれない。どうしよう、といろいろと考えて、他の素材もありますから、作ってみました。でも、うまくいかない。それで、今度はエサを作りました。松ぼっくりのところにご飯を詰めて、さらにその中に鳥のエサを詰めて。それを巣箱の先にかけてみよう、というそんな活動もしていました。「巣箱を作ったのだけど、鳥が来ないねー」という発言から、活動が進んでいきました。これは種を植えているところですね。そのようなこともありました。

「ドキュメンテーション」というのは「資料化」ということですけれ

## 何をどう記録し、プレゼンするか

- 子どもたちの行為の観察と解釈
  - 子どもたちのことば、表現される感情や考え
  - 子どもたちが作る活動の目的、展開、成果
  - 活動を展開させた統合的なプロセス
  - 保育哲学：発達を全体的統合的にとらえる。それを詩的で美しい言葉で表現。
- 一吟味、省察、理論化



## 5. ドキュメンテーション

ドキュメンテーションの意味

活動資料・記録  
作り

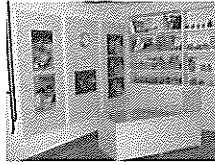
種類

- (1) ポートフォリオ、個人記録。
- (2) 壁の掲示やお知らせ

子どもへ：保育者からのメッセージ。  
子どもが自分の成長を知るツール。  
親と地域の人に：子どもがする体験を知り関心をもってもらうツール  
保育者自身に：保育活動の復習と明確化の行為。まず観察し、意味を考察し、再解釈し、新しいアイデアを得るための行為。  
他の保育者に：保育の目的理念を共有、共に吟味するためのツール。

ども、保育者がドキュメンテーションを作ることによって考察したり解釈したり反省したりする、そういう道具としてのドキュメンテーションです。その部分についてはあとで読んでください。いろいろな成果があつて、こういうふうには壁に貼つてあつて、例えば、受け入れ室、朝お母さんやお父さんたちが来る部屋ですが、時計の下に「子どもには時間が必要で、知識を得るための時間、自分を知るための時間」と書いてあります。これによって保育園のメッセージを伝えているということもあります。これは「保育園の最初の日」といって、0歳児クラスに、毎年かかっているドキュメンテーションですけれども、子どもが入園した最初の日を観察して記録し、ここに写真とともに書いてあります。そして、そのときの子どもの身長の高さの紐が入っています。これはいつでも取り出せるようになっていきます。1年間のうちに親子が来て、それを取り出してみて、「あなたこんなに大きくなったのね」、「こんなに小さかったんだよー、大きくなったんだねー」と親子が成長を確かめるためにこうして置いてあります。そんなふうに先生たちがいろいろなアイデアを持っています。

## ドキュメンテーションの例



受け入れ室



子どもには時間が必要です

知識を得るための時間、自分を知るための時間



負色い日の長さ  
は、  
保育園の最初の  
日の長さ。

### 保育園の最初の日

新たな出会い、新たな関係、新たなコミュニケーションの可能性に  
機会を提供する場所。

一人ひとりの歴史が出会い、共同の歴史を作り出す源となる場所。

## 「毎月の遊び」のドキュメンテーションから 「0歳の遊び」

知  
り  
あ  
う  
9  
月



9月の日々は、大人にも子供にも、みんなにとって感動的だった。  
おもちゃで遊ぶことは、お互いに知り合うことや、最初のコミュニ  
ケーションが生まれることを容易にした。

## ピストイアのすぐれた保育を支える条件(続)

- (4) 管理ではなく協議による。園長がない。教育コーディネータの存在による柔軟な運営。
- (5) すぐれた行政者の指導性と長年の継続実績。行政と現場の結束。
- (6) 親の理解と参加。親を巻き込む保育、保育行政。
- (7) 研究と実践の共同。研究者との連携。実践研究

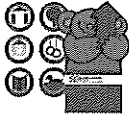
## 6. ピストイアのすぐれた保育を支える条件

- (1) 子どもは主体性をもった市民という意識＝乳幼児期の重要性の認識＝市の就学前期への予算に反映
- (2) 一体化行政による、保育所、幼児学校、学校、児童館の間の連携と一貫性
- (3) 職員の労働環境  
希望すれば同じ職場に長くいられる。  
子どもに接する時間以外の勤務時間の確保。  
権利としての有給の研修。事務的な仕事から解放  
自分の専門性を追求できる。専門家としての誇り

とても楽しくてユニークな活動を展開できるための条件について考えてみました。少しまとめてみますと、1番目は町や市が子どもを主体性を持った市民とみていること、そういう意識があります。つまり、乳幼児期はとても重要な、人生の中で重要な時期であるという認識ですね。そのことは、市の就学前期の予算によく反映されています。2番目は、一体化行政ということですね。保育所、幼児学校、学校が一体となった行政をしているということ。3番目は多少重複しますが、労働環境の問題があります。それから4番目は管理の問題があります。5番目は優れた行政者の視野、やはり指導性と継続性ということですね。6番目は親の理解と参加。やはり親を引き入れているということ。それから、7番目は研究と実践ということがあります。

少し詳しく見てみると、1番の「子どもは主体的な市民である」ということは、保育と町とが一体だという意識があるということです。これは子どもに町を知ってもらうこともあるし、子どもがふだん保育園や幼稚園に閉じこもっていて、町が日中子どもの姿を見ないのでなくて、どんどん保育の中で町に出てきてもらう、ということもしています。そういうことを通して、園の子どもと町の人たちが会える機会ができ、子どもたちにコミュニティーの一員であるという帰属意識を育てる一方で、

「子どもに優しい町」  
の子ども施設のシンボルマーク



(1) 町とともにある保育：町は教育資源  
子どもは主体的な市民

- ・町全体、まわりの自然を教育資源とみなし、町に開かれた保育、自然と一体化した保育 ↓
- ・町の探索、探検。有能なガイド役の大人と街を回り美しく興味深い場所を発見。  
＝アイデンティティの確立を助け、同時に自分もコミュニティの一員である帰属意識(sense of belonging)を作る。

大人たちも子どもたちをコミュニティの一員とみる意識を育てるとい  
う、そういう意識を持つことができるということがあります。これもか  
なり意識的にやっているということです。

シンボルマークもいろいろと作られています。就学前の子どもに対す  
る予算が、数年前の規模ですけれども、市の全体予算の17%と非常に多  
いです。このところ低下していて、大変な状況にあるようですが。

それから職場環境として、継続性が非常に大きな役割を果たしていま  
す。希望すればずっと同じ職場にいられるので、実践の蓄積があるし長  
い間に蓄積したチームワークの良さもあります。問題はあっても、  
なるべくコーディネーターという仲介者が入って問題を解決するような  
仕組みができています。

大事なことは、子どもと接していない労働時間、言い換えると労働時  
間の中に子どもと接していない時間、が確保されているということです。  
週36時間はもとも少ないですが、そのうち6時間は子どもと接してい  
ない時間がある。週の中で6時間もあるということですね。それから、  
研修や自己研修の時間が毎月20時間ある、これも大きなことです。ドキ  
ュメンテーションを作るとか反省をするとか、そういうこともこの時間  
の中でできるということです。それから、さらにその中に、職員が余計

(4)子どもと接していない労働時間についての考え方

⇒子どもと接していない時間の保障。週36時間の労働時間の30時間は実際の保育に、残り6時間は親との関係作りやその他の付随的な仕事(ex.ドキュメンテーション作り)に充てることが明文化。

・年間労働日は42週間。

(5)権利としての研修

子どもと直接接する時間以外に、毎月20時間を自己研修の時間に充てることができる。

(2)市の就学前の子どもの予算

全体予算の17%  
⇒但し、永久に続くわけではない。園の補助金の大幅カット。  
質の低下をどう防ぐかが課題

(3)希望すれば同じ職場にいられる

仕事の継続性、蓄積、チームワークを重視。問題には議論、研修、コーディネーターで対処。それでも問題のときは転動や交代もある。

なこと、つまり教育以外のことをしなくてもいいということがあります。これは園長がいない代わりに、教育コーディネーターが園外、市の行政の中にいて、彼らがいろいろななかたちで調整役を担っているのです。研修活動、親と園の関係、園同士の連絡、行政との連絡などの調整をする。教育コーディネーターがこのような仕事を引き受けるので、職員は保育に専念できるわけです。いろいろなことを合議で決めるのも特徴です。写真は職員会議の様子です。

こうした職場環境の中で、保育者は自分の専門性を育てることができません。キャリアの中で、いろいろな研修の場で、同じテーマをずっと追究することができません。そうすると、保育者はそれぞれの道の専門家になれるわけですね。例えば、ここの写真にいる人は、本の専門家になった人です。本を理解しているし、語りもできる。園の中に立派な図書館のようなものを作り、子どもの本のことは何でも知っており、他の園に教えに行ったりすることもできるそうです。

先ほどの「アレブルー」という美術に特化した児童館ですが、この人は、もともと保育者で美術の専門家ではないのですけれども、彼女にインタビューをしたときに、「美術の専門家が児童館において美術を教えるのではなくて、保育の専門家が美術を教えるところに意味があるのだ」

#### (7) 保育者は自分の専門性を育てる

- ・保育者たちは興味ある保育領域やテーマを追求。専門性を獲得していく。
- ・キャリアの途中で、現場にずっと居る人、コーディネーターになる人、よりテーマを特化した児童館等自分のテーマを発展した職場に変わることもできる。

#### (6) 園長のいない園と教育コーディネーター

- ・職員は教育・保育に関わることを行う。会議制をとり、役割分担はあるものの、責任者はいない。
- ・教育コーディネーターの大きな関わり: 園と行政、親、他の施設等との調整。教育プログラム作り、環境整備、行政や他施設との連携、親との連携等の調整。他機関と協同の研修も担当。



と教えてくれました。「保育の中で、子どもたちに美しいものは素晴らしいということを教えるのが私たちの役目である」と彼女は言います。「内的な美しさを感じる感受性が幼児期には必要で、それを教えていく。美術についてはあとで教えればよい。美術の専門家が美術を教えるのではなくて、最初の感受性、美的な感受性を教えるのが私たちの役目なのです。それは保育者だからできるのです」というふうに彼女は語っていました。

なぜそういうことが可能なのでしょう。以前にもいろいろと聞いてきましたが、今回もなるほどという発言があつて、それを書き留めてきました。「継続は力」ということですね。しかも、レτζヨの馬拉グツツエのような特定の人ではなく、保育の現場や行政の人たちの持続的な努力です。彼らはみな女性なのですが、70年代初頭にその保育法ができたちょうどそのとき、女性運動が盛り上がり経済的にも豊かで、進歩的な機運が高まったときに、女性たちが集まって子どもたちに新しい教育がしたい、幼稚園や保育園を変革したいのだという思いでグループができたそうです。その人たちがずっと今まで同じ職場にいて、「持続した努力」があつたということですね。ピストイアの教育はこうして作られてきたのです。制度を作ったのは人だけでも、それを動かしてきた



### (8)キーパーソンズの存在

「1970年代初頭、経済的にも豊かで進歩的、民主的な機運が高まった時代に、新しい教育をしたい、学校(幼稚園)を変革したいという女性たちがグループを作った。それが現在市立の教育の中心にいる女性たちで、研究者たちの参加も得て、子どもたちに何をすべきか、盛んに議論をしてきた」

(Aera BlueのAngelaさんの話から)

特に、市役所の教育部門の中心的人人は同じ部署に35年間いて、ピストイアの就学前教育を作り上げてきた。

### 保育者としての専門性の考え方

「美術の専門家が子どもを指導するのではなく、保育の専門家が美術を教える意味」

「美しいものはすばらしいと思うきっかけを、子どもにつかんでほしい。内的な美しきを感じる感受性が今(幼児期)には大事なので、感性を刺激する環境を作る。美術がわかるのはあとでよい」



のもやはり人で、そのパッション、その思いがずーっとつながってきたのだと思います。その間にいろいろな人たちが引き込まれてきたという歴史がありました。30年、40年の歴史があったということを、ずっと感じてきてはいましたが、改めてそこではっきり知ることができました。最初にピストイアの教育づくりにかかわった人は35年間同じポストにあって、昨年9月に定年退職しました。現在「アレブルー」を担っている方も今年の5月に定年退職だそうで、みな団塊の世代なので一斉に辞めていきます。ここに新しい問題が出てきています。この他にも、親との積極的な連携、研究者と実践者との連携、ヨーロッパ規模での連携もありました。こうしたさまざまな動きを通して、総合されてピストイアの教育・保育ができてきているのだということを感じています。

そうは言うものの、実はこのようなことが長くは続かない、自動的に続かないわけで、一つの転換点にあるようです。それはベルルスコーニの新自由主義のネオリベの政治のもと、今まで出ていた国の補助金が大幅にカットされてきたことです。だから、市の予算も削らざるを得ない。私たちが訪問したときに、ちょうどそのことについて市長が親たちや乳幼児の施設の説明会を開くということで、教育コーディネーターの方や保育者の方もどんなことがあるのだろうかという心配していました。後で

## 転換点の危機

行政と現場の中心的な人々の努力と結束で作ってきたピストイアの保育も、転換点を迎えている。

- \* 国の補助金の大幅カット。市行政も予算削減
- \* 世代交代。後継者の問題

### (9) 親との積極的な協働

- ・日常生活:ドキュメンテーションによる情報発信
- ・教材協力や外出、行事等の参加
- ・教育コーディネータによる日常の問題の調整
- ・父母会
- ・祖父母世代との(からの)繋がり

### (10) 研究と実践の連携

- 国内、ヨーロッパ規模の研究者との交流

聞いたら、「市長は非常によく説明してくれ、親の話もよく聞いてくれました」と言っていました。80人くらいの親が参加して、PTAなどの代表者だったのでしようけども、自由に発言ができたことに、親たちもそこで一定の満足を得たという話でした。対話ができているのだということ、図らずも実感をしました。予算が大幅にカットされれば今後どうなるかは分かりませんが、それからもう一つ、世代交代の問題、次はどうやってつなげていくかという問題があります。今までずっとそういうことを支えてきた市長が来年で任期が切れて、もう2期目になるので次の選挙に立候補ができないそうで、新たな、それを継ぐ立候補者が今いないそうです。行政の難しさだと思えますけれども、今まで築いてきたものをどうやって、どこまで維持できるのか、質をどう下げないかということが今の問題になっていることだと思います。

そういうところから日本への示唆として言えば、たくさんありますけれども、一つに、子どもに対する見方。子ども、あるいは乳幼児期の重要性に対する見方ですよね。それが先ほど牧野先生がお話しになられたように、子どもを中心にとのようにして見られるかということがいちばん大きな問題だと思います。それから保育者が自由に、やはり柔軟に、自分のやりたいことが発揮できるための職場というものをどう作ってい

### 日本への示唆

- 子どもに対する見方: 守るべき弱い、「かわいい」存在⇒主体性をもった存在
- 保育への柔軟な考え方
- 美に対する考え方
- 保育者が生き生きと自分を発揮できる保育のためには？

くか、これも非常に大きなことだと思えます。日本はマイナス主義というのか、こういう悪いことが起こったらどうしようと考えて、人を回してみたり、当たり外れがあるから転勤しようというふうになるわけです。そういう悪いほうを見て直していくのではなくて、良いほうを見ようというのがあると思うのです。本当に悪かったらそこで変えればいい、という考え方があるように思います。美に対する考え方にしても、とても教えられるところがあります。以上がピストイアの保育です。

もう一つの話題、フランスの子育て支援についてですが、私が実際に見てきました活動をフィルムで見ていただくことにします。今回は、子育て支援の共通性についてフランス、ベルギー、イタリア、日本の4カ国の実地調査をしてきました。どの国も2000年くらいから子育て支援の重要性が認識されるようになり、そういう施設をつくろう、増やそうという動きが出てきました。それがやはり親子が一緒に遊びたい、遊ぶ場がほしいという要望があり、その背景には親としての悩みや育児の悩みや育児不安というのがどの国でも広がっているということがあるのです。それからまた子どもが他の子と遊ぶ機会が少ないということもあります。そういうニーズがあつて、どの国にも非常に共通しているので

ヨーロッパの革新的な方向は、

- 0歳から就学までの一貫した教育理念
- 職員の資質の向上、高等教育での資格(4年制大学など)
- 保育における教育と世話の統合。あるいは世話にも教育的な要素を見る。統合的な教育。
- 親の参加、親と職員の連携
- 乳幼児期の支援への財源の強化
- 多様性と公平性への配慮の強化

はないかというところから今回の共同研究の話が出てきました。

その4カ国の全体のことはさておいて、そのうちのフランスについてだけ少しお話をします。フランスは実は、親子の受け入れの場、L'AFEP、ラベとかレーベとかと言うのですけれども、ヨーロッパの中でいちばん古いと思います。70年代に精神分析の人たちが始めました。ラカン派がつくったもの。それから、ドルトという精神分析家が始めたメゾンヴェルトとこのころがあります。70年代の終わりですね。ドルトという人は非常に大衆性のある人で、ラジオで子育て相談を担当していた人なので、その知名度もあって、フランスだけではなく30カ国に広がっています。非常に独特のやり方をとっていて、治療ではないけれど親の悩みや夫婦関係の問題の悩みを聴くことを重視しています。さらに、子どもの社会化、つまり子どもが他の子どもと遊ぶ機会を増やすということを目的にしていますが、匿名性を重視しているのも私たちからすると非常に独特です。それは子どもの名前は出すけれども、それ以外は一切何も出さないということなのです。住所も親の名前も。親子が誰でも自由に来られるようにするためだと言います。職員は精神分析あるいは臨床心理の専門家で、3人1チームで、しかも毎日人を替える。1週間交代ですけれども、そこで聞いたことを次の人に引き継がない。つまり、継続性をわ

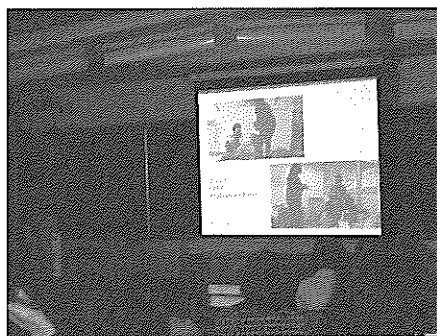
「ヨーロッパの子どもたち」の乳幼児期サービス政策についての10項目の提言

- ①すべての子どもに利用の権利を保障すること。
- ②サービスは無償
- ③ホリスティックで多目的な教育的アプローチ
- ④親、子ども、地域の参加は本質的な価値
- ⑤一貫性のある政策の枠組みと共通のアプローチ
- ⑥多様性と選択可能性の保証
- ⑦参加的、民主的で透明な評価の仕組み
- ⑧乳幼児期専門職の学校教員との対等な位置
- ⑨義務教育との強くて対等な連携
- ⑩国際間の連携

ざわざ持たないというのが非常に独特なのです。三輪車の部屋があるのですが、赤い線が引いてあって、そこから先は行ってはいけないという教育的制限というか、社会的なルールを一つ作って教えているのですけれども。一期一会を大切にしているところが非常に大きな特色なのですが、そのやり方でずっとメゾンヴェルトは来ています。

70年の終わりメゾンヴェルト式が広まって、その後ほとんど他の施設ができなかったのですが、90年頃になって、今度は移民地域を中心として非常に貧しい、家庭崩壊であるとか生活困難な家庭の支援ということでの施設ができてきます。これが第二期です。福祉系の人たちが進めています。でも、やり方はメゾンヴェルト流なのです。やはり「一期一会性」ということを強調したものです。第三期はそこに助成金が入って助成金の対象の基準がつけられました。やはり匿名性や支援者が2人以上などが強調されています。最近新しくできてきたものは、ようやくメゾンヴェルトから脱したものになりつつあります。親に焦点を当てて、親に寄り添うというかたちのネットワークができてきたのです。

なぜこのような話を出したかと言いますと、メゾンヴェルトの縛りが強く、無くなつてはいないので亡霊ではないですけど、こうでなくてはならないという固定概念がずっとある。いまだにそうなのです。いま



だに個別性、匿名性にこだわるのは、まさに個の重視です。一人ひとりの話は聞くけれども、母親同士をつなぐことはしない。それから引き継ぐこともしないし、医療機関につなぐこともしない。非常に個人に特化しているというのが大きな特徴なのです。さらに、開設日が非常に少ない。ほとんど週2日の半日です。このように子どもの名前が書いてあって、親が来たときに名前を書くのですが、最後にみんなが帰って行くときに職員が全部消してしまうのです。全然記録に残さない。それがポリシーだということです。でも、親の姿を見ていると、日本と非常に似ています。親同士が一緒に話したり、助け合ったり、友だちを作りたいということもあります。けれど、その場だけなのです。その後どうなるかということ、施設としてはそこをつなげることは全然していません。このような活動を見ると、日本の特徴は良いとか悪いとかいうことではなく、地域なのだということを実感します。地域の間関係をつくっていく、あるいは地域を再生していくことは日本の非常に大きな特徴です。先ほど牧野先生のお話にもありましたが、もともと地域が、園児や家族が支えていたものが消えていて、それをやはり戻したいという気持ち私たちの中にあるのだと思うのです。そういうことで、個別にはなくて親同士をつなげていくということに、やはり日本の特徴が

Grazie



あるということが非常に強く感じられます。そして、虐待とか障がいのある子どもなど要保護児童を他につなげていく、ネットワークづくりも日本の特徴なのだろうというふうに思います。それから、開設日が多いのはそれだけ需要が多いのでしようが、それは何なのだろうということも思います。私の中ではまだうまく消化されていないのですが、日本人にこれだけ子育て支援施設の需要が多いことの意味をもう一度考えてみようと思っています。

それから、日本の情報の速さ、ITを使った情報の速さと、特に、携帯メールです。ケータイを使ってすぐその場で他の親に、親から親に情報が伝わる、そうやって情報を共有する、あるいはネットワークをつなげる。そういうことはフランスにもイタリアにもないですね。これは両刃だとは思いますが、日本の大きな特徴というふうに見えています。これについてはもう少し私の中でも考え、4カ国の共同研究の中で詰めていきたいと思っています。

少し駆け足になりましたけれども、これでお話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

〔フィルム紹介は省略〕

## 【質疑応答】

大戸 ありがとうございます。先ほどお二人の紹介をいたしましたけれども、ご専門の紹介で終わりました。実は、みなさんご承知のように、一昨日とつても大きな地震がありました。牧野先生も避難の方を一人抱えておられ、さらに星先生はまだご自宅に帰っていらっしゃらなくて、おうちの中がどんな具合か半心配しながらも、それぞれに大変意義深いお話をしていただきました。牧野先生からは、子どもが産み育つ基盤となる家族や親の状況についてのご報告、そしてまた、将来親になる青少年のために特別な家庭科教育の学習を計画されたり、また子育てを終わった方々の子育て力を活用するというような試みもされているというお話でした。また、星先生のお話はピストイアとパリという、日本以外の国の子育ての実態をご紹介いただきました。日本でこれは大切と思っただけで一生懸命にやり、その結果悩んでいるようなことも、結局日本という文化圏の悩みであったり努力であったりするのかなあとということも教えていただきました。これから約30分間、みなさまからのご感想や質疑応答に入らせていただきます。最初に、ご質問や感想をまとめてお伺いして、それから各先生にお答えいただきたいと思えます。感想、ご質問のある方は最初にご所属とお名前をおっしゃっていただいて、どちらかの先生にご質問がある場合には先生のお名前もおっしゃってください。一般的な感想でも結構です。何かご質問なり感想なりがございましたらどうぞ手を挙げてください。いかがでしょうか。

\* \* \*



すぐには手が挙がらないようですので、お二人の先生方の双方にお尋ねすることにしましょうか。日本の立場からフランスやイタリアの様子を聞いた牧野先生から何かご感想がお有りでしたら伺いましょう。それから星先生には、日本の子育て支援がいま非常に過剰化していて、保育者がヘトヘトになっている実態についてはどのような感想をお持ちでしょうか。最初に先生方相互のご感想を伺いながら、会場のみなさんの感想も伺ってまいりたいと思います。では、牧野先生からどうぞ。

牧野 お母さんたちの子育ての状況や、共通の場所で集まって話し合うことや相談し合うことによって悩みを解消していくというところは、やはり共通なのだなあとということを最初にまず思いました。一つ疑問に思いましたことは、イタリアやフランスもそうなのですから、0歳から3歳、そして3歳から6歳というところでつながって公的な援助が受けられることについて、これは全部公的な運営でいくのかということ。日本は幼稚園も公立幼稚園が消滅するという状態で、ほとんど私立の、私的なものに任されていますよね。ピストイアの設備の美しいこと、色の素晴らしいこと、子どものために専門の人がずっと何年間も同じところで関わって、そしてその地域のために仕事をしているという、そういう継続性を、公的な保障があつてできているというところがすごく素晴らしいと思います。お金のかけ方が半端ではないはずです。日本の私立と公立との関係と比べて、ヨーロッパではどうなっているのか、そのところをぜひとも伺いたいと思います。

星 OECD加盟国のほとんどは、幼児教育、少なくとも3歳から後は無償の公的教育です。無償が基本

なのでですね。基本的に3歳以降は公的な予算で教育をするというのが機会均等であり、格差をつくらない。つまり、就学前の不利な条件は、学校教育に影響し、学校で落ちこぼれをつくる。そのことは結局、非行をつくったり、労働力からいっても非常に低い労働力であったり、貧しい家庭環境であったり、低い賃金であったりと、悪い影響をずっとつくる。だから最初のところでちゃんと平等を保障するということは公的にするのだ、ということ徹底していると思います。

大戸 そういうところが不思議ですね。日本は、「子ども手当」が立ち上がった途端にバーゲンされたり、今度もまたどこまで続くか分からないほど弱いですね。

星 だから、「子ども手当か、保育所か」とOR（または）で語るでしょ。「両方あって当たり前」というのが、ヨーロッパのかなりの国の基本だと思えます。

大戸 いま牧野先生からもご質問があったのですけれども、ヨーロッパでも子育て支援に対する関心が高まっていること、また、未満児の教育への高まりは日本も同列にあるように感じますね。ただ、あり方はどうも随分と違うようで、フランスの場合「1回きり、個人」と割り切っていますが、日本は何と云っても連続性とか連帯とかつながりを重視し、この「つなげること」に非常にエネルギーを使っています。国によって支援のスタイルは違うのでしょう。もう一つ興味深く思いましたのは、やはりヨーロッパでも、0から6歳までの一貫した教育と保育を考えていこうとする傾向です。日本でも「新保育シ

STEM」というかたちで出かけていたのですが、2ヶ月ちょっとで実施延期ということになりました。日本では0―3から3―6まで「接続」という言葉がよく出ていますけれども、子どもから見ると連続して成長していますから、3歳になったら接続しないとつながらないような存在では決してない。成長は連続しているのです。そういう連続した成長なり発達なりを、一貫した考え方で育てていこうというところに、私たちの大きな仕事が残っていると思うのですけれども。

榊原 大変興味深く聞かせていただきました。ピストイアには園長先生がいないというのを聞いてびっくりしましたね。日本で園長先生がいなかったらどうなるかと思いました。牧野先生がご講演の最後におっしゃったクーンツさんの言葉に、「両親だけには任せておけない」、つまり子育てを社会において行うとありましたが、やはりそこがヨーロッパと日本とは違うのでしょうか。日本でもし「うちの保育園は園長先生がいなくてやっているのです」と言ったら、おそらく親が「えっ!？」と思うと思うのですが、そのあたりが文化的な差なのかどうかと思ったものですから、ちょっとお聞きしたいのですが。

星 イタリアがみんなそうというわけではないので、たぶん文化ではなくて制度だと思っています。教育コーディネーターという人が、管理職でも責任者でもないけれども、横の調整をたくさん行っているのです。実際上はそれで成り立っているのです。誰かが管理者で誰かが責任者、何かまずいことがあったら誰の責任かというように、その辺を問わないのではないかと私は思っています。合議制で話し合っていて、当事者同士でうまく話し合いができれば、そのコーディネーターという第三者が入って調整をするので、

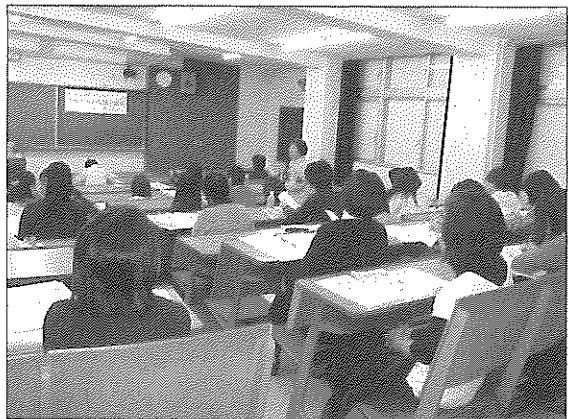
「解決したらそれでいいではないか」という考えなのでしょう。たぶんそれでうまくいっているのだと思うのですがね。そういう意味では文化的と言えるでしょうか。

フロアからの発言1（上垣内伸子先生） 質問ではなく、柳原先生の補足です。私もそこがとても不思議だなと思っています。星先生と一緒に職員会議に2つ、保育園と幼稚園で出させていただいたのですね。そうすると、その日の内容というのでしょうか、その日の会議のテーマによって司会進行の人がそれぞれ変わっていくということがありました。テーマについて、それぞれがクラス担任として年齢が違えば意見を出し合ったりしていました。今度こういうプロジェクトをするのだけどうやって進めようかという非常に具体的な活動内容に対する会議であれば、そのプロジェクトの責任者が司会をし、昨年の資料を持って来る人や、「去年はこうだったけど」とか「この材料について私は調べてきたのだけ」と、みなさん非常に保育に対して主体的なので、その一つのプロジェクトをやるうと思ったらそれに対して考えているものをそれぞれが持ち寄っていて、それが調和していくのでしょうか、ハーモニーというような感じで進んでいました。星先生のおっしゃっていたコーディネーターというのは、市に保育園のコーディネーター、幼稚園のコーディネーターというふうにいらいっしやるのですが、そういう会議のときにはなるべく参加されているようで、そこで少し外接的というか、ちよつと外のような立場で、「これはこういうことなのね」とまとめてみたり、質問をしたり、市の方針としておっしゃったりというような調整をされていました。職員会議に参加させていただいたときにも、「すごくユニークだなあ」と思ったというよりは、やはり非常に活発で生き生きとした保育集団は、日本だってこういうふ

うに会議しているよな、と感じました。ただ、違いはそのコーディネーターの存在であると思います。

0歳から6歳の接続について、ということなのですが、今回イタリアの保育園に行つて、3時半に保育が終わるのですが、お迎えに来る人の中にはおじいちゃんがとても多かったです。そこで感じたのは、専業主婦とか働いているお母さんとかではなくて、どの人も就労できる年代の人であれば、何らかのかたちで、子育て中であろうとなかろうと、社会に貢献している仕事を持っていると感じました。なので、すべての子どもに開かれているというのは当たり前なのでしょうか。子育て中にはやはり子育てをしたい、2年間は私は仕事をしないと、いろいろな方がいらつしやったのですが、みんなが働くのが当たり前になっているという印象でした。

星 イタリアもそうですが、フランスはもう完全に「なぜ働かないの？」というくらいに働くことが当たり前。働く働かないという選択肢もいちいち問わないというくらい。働かなくても、それはそういう人もいるかもしれないけれども、取り立てて何も言わず、それは選択肢の一つにすぎないのです。だから、公的に育てるのは当たり前ですよ。公的な機関がそこに入ってくるのは当たり前だし、それに対して、例えば、会社、雇用者も税金を払う。利用者はわずかの利用料を払う。所得税からももちろん取



られる。いろいろな人が税金を出して、そういう体勢を社会でつくっていることだと思うのですね。だから、やはり先ほどの牧野先生のお話につながると思うのですが。ちよつと感想めいたこと言ってもいいかしら。お母さんにとって子どもがすぐ生き甲斐であり、子どもを自分で囲うという姿勢が、日本ではどこから出てくるのでしょうか。歴史的に長いことではあるのだろうけれど、ということを非常に感じるのです。フランスは特にそうだと思うのですが、ちよつとしたことで気軽に人に預けもするし、地域の強いつながりはなくても、他人でも、あまりよく知らない人でも構わないから、ちよつと預けたり預けられたりということを平気でするし、そんなに子どもに全精力は使わないという気がします。子育ては生活の一つのアスペクトであって、お互いに、子どもにとってもきつとそうだし、もつと気軽にできるかなというくらいで子育てをしているのではないかなという気がしますね。フランスの人から見たら、日本には子育て支援の需要があるということも含めて、「なぜ、そんなに？」ときっと思うのではないかという気がします。

フロアからの発言2 今のお話の「公的な」というところですが、今回の趣旨にも書いてあったように、そこには子育て支援や幼保一体化、それからいま盛んに言われている日本の保育行政の方向が問題になります。どうして公的にならないかと言うと、家族制度と言いますか、いわゆる近代家族を元にして日本の税制やさまざまな制度がそうなっているからではないでしょうか。フランスもイタリアもそのようですけど、私たちが先日訪問しましたスウェーデンも専業主婦は1%しかいません。だから、「働きま

すか、働きませんか」ではなくて、社会全体で「子どもは社会の子」というものができていると思いま

す。日本でこのところずっと論議が続いている、保育の方向をどう進めていくのか、「一体化する、一体化しない」というような一体化の是非より、税制や制度が公的に向くのか私的に向くのかということをお問わないで、一体化の中身だけを問題にしていますから、それだけなら一体化は大いに結構なのだと思います。いま言われている方向は大いに結構。だけれども、どこが問題かというところ、その公共性を問わないこと。公共性というのは私的なままにしておくことが問題なのです。では、どういうふうに教育を公共的にしていくかという方向について、何か日本への示唆があったらお話しいただきたいと思えます。家族制度のことでは牧野先生にお話しいただきたいです。

それからぜひ大戸先生に、今回3人の先生方を並べてここにシンポジウムを企画した趣旨に、何かそういうようなことがあると思いますので、そのあたりの趣旨をもう一回お話しただけならありがたいと思います。以前、私が共同保育所をやっていたところは園長はいませんでした。それはちゃんと一人ひとりが、親が主体になっていたからだと思うのです。すべての子どもの子育ての関係者が主体になっているとそれができるし、その代わりに、コーディネーターではなくて運営委員会というものがあり、運営委員長がいたと思うのですけど、交代でやっていくというかたちでした。その辺のところを、今後の日本への方向に向けてよろしく願います。

大戸 大変大きな質問でございますけれども。

牧野 とても大事な点を言っていたらと思います。家族の中にさまざまな責任が取り込まれて

いるという、家族とそれから公的なものという境界線が非常に強いということがあると思います。日本は家族が福祉を担ったり、子育てを担ったりというかたちで、明治以降の近代化の中で、家父長を中心に家制度を整えてきました。これは、列強諸国に追いついて日本が戸籍制度をつくり、そして家長の責任において徴兵制を行い、そしてコントロールをしていくという家族制度を取り入れたというところに、うまく近代化を達成する役目があったのです。そのまさに頂点となって責任を負う人を家長1人に決めるというような仕組みも、さっきの園長なり、さまざまな施設での管理者責任者という仕組みだと思ふのです。戦後民主化されて、夫婦単位の家族が成立しましたけど、これまた家族が夫婦核家族、そして、マイホーム主義のような家族単位で孤立していくというかたちをとりました。その中に家長がいなくなつたという民主的な仕組みにはなりませんでしたけれども、さまざまな責任その他を家族単位、世帯単位にしていることに変わりはありません。この世帯単位が、今度また高度経済成長をたどるときに、夫一人の片働きで家族員を養うという仕組みをつくりましたから、そこで妻は家において保育をするという、これまた奇妙に明治以来の、性による役割分業という、日本の儒教的な男女の別の役割というものをうまくそこに乗せてしまったのです。片働きで世帯単位で保障していくという仕組みです。だから、夫は家族のために猛烈に働いて、夫のおかげで女性は無職無収入で子育てに専念し、老人の介護をし、ということだったので。それが、経済成長のおかげで、転勤も多くなり、それぞれの家族が地域で流動化して地域の中に散りばめられましたから、共同体に支えられている、地域全体が連帯している中の家族ではなくて、孤立の核家族が夫と妻を単位にして、いまご質問の中でもおっしゃつたように、税制がなにごんにも世帯単位になっています。女は家において夫に稼いでもらつてそこですべての家庭を営む責



任があるということですね。まさに「技術家庭科で男は技術・生産に、女は家庭を守れ」と。家庭科教育は女子のみ必修もしくは別学で行うというように、教育制度としてそういうかたちをつくってききました。

ですから、日本は何か問題があると全部「家族」です。全部家族で、それが閉じるのですね。周りに共同体がありませんし、支えられていないから、恥ずかしいことがあると家族の中だけのことにする、ということと助けを求めにくい。責任が家族にきます。親の役割や責任はそれだけ公的にも大きくなりますから、親は我が子が立派に成長してくれればいいというかたちで、責任を引き受けた。あらゆるところで家族と公的なものに強い境界が引かれました。これは、明治以降の近代化、それから戦後の経済成長というようなものを支える仕組みになったのです。ところが今や、夫が一人働きで夫婦で子どもを育てることができている家族なんて本当に少数派で、その世の中の動きが、「専業主婦と子ども2人」というモデルでできあがっていた時代とは全く合わなくなってしまうです。それなのに古い考え方のまますべての制度を運用していこうとしているところとさまざま問題が出てくるのです。これは家族社会学ではいろいろなかたちで言われています。

諸外国を見渡せば、本当にいろいろな家族があつて、シングルマザー、シングルファザー、それから同性愛の人たちが養子をとつて子どもを育てていたり、離婚再婚が繰り返されていたり、と非常に複雑な家族になっています。いま年金制度の、専業主婦の年金制度の救済をやっていますけれども、女性だつて同じ職場にずっと働き続ける人はいないので、夫に扶養されているまま一生を終えるというかたちをとっている人はほんの極少数であるのに、もう一世代前はそういう家族いっぱいありましたけ

ど、さまざまに家族が変わってきているのです。これは非常に効率よい仕組みをつくってきたお陰でできたわけで、またそのお陰で経済は成長したのですけれども、人々は動き、いろいろな世界の影響を受けて家族が変わってきているというところがあります。もはや、家族単位に福祉とか子育てとか、そういうものを任せるといふことを、本当に根本から切り替えないとダメですよ。

大戸 今のお話ですが、家族が教育や福祉の拠点になって、そこが単位となって何でも背負ってしまうという伝統が非常に長かったですね。そこから脱皮しようというのは、私も大賛成です。ところが、そうすると今度は「子育て支援センター」がいろいろなサービスをてんこ盛りにして、やはり一点に集中してしまう。それで、先ほどのご発言にピストイアでは保育所が3時半に終わって話し合いをするというお話がありましたけれども、日本の保育所ではやれません。日本の幼稚園のごく一部ではやっているかもしれませんが。保育所では全体が時間をかけて、月1回話し合いが持てたらいいところです。先日、都内のある区が多機能型の子育て支援施設を見してきました。今日も会場にそのセンターの方が来ていらつしゃいますね。保育所あり、一時保育あり、それから子育てセンター的な広場あり、発達相談あり、この4つが合体している施設です。この4つは一つの屋根の下にあるけれども、相互に意見交換する時間がないほど、長時間少ない人数でやっているのが日本の子育て支援の実態なのです。

それで、私は本日のシンポジウムの名前をちよつと変えたほうがいいかなあと思ひ出したのです。「子育て力」もですが「子育て支援力」の、「支援」の危機もいま同時に起こっているのです。支援が必要だといふことはこの10年、20年でだいたい普及してきたと思ひます。「子育て」といふのは親だけの仕事

じゃない、みんなでやるんだよ、地域こそってやるんだよ」というように。それはいいのですが、今度は支援センターができれば、「はい、そちらへどうぞ、どうぞ」という過剰な期待が持たれているということがありまして。創生、蘇生させるための一つの視点として、確かにご指摘の公共性の必要はあるのですが、公共性の中にもやはり質を高める、質を保障するという条件の下の公共性がないといけないのではないのでしょうか。例えば、先ほどお話しした区の場合では、委託のかたちでお金を出しています。そうすると子育て支援施設の数は揃っていても質を向上するには至っていません。多機能型の子育て支援施設の経営主体が、100年以上の福祉の伝統を持つ社会福祉法人から、私鉄交通機関の会社といった企業まであり、みんな同じ扱いなのです。ですから、その人たち関係者が集まって、「こういう多機能の、複雑な機能を同時に成功させるためにはどうしたらいいか」という話し合いの時間はまるでないのです。そういうふうには、数の時代から質へと脱皮するために、私たちは大いに目を光らせて、蘇生させていかないとけません。黙っているとんでもないことになります。やはり、家族に代わって子育てセンターにすべての荷物が集中するというその繰り返しではなく、お互いにボールをやりとりするかたちになるのではないかと、そこを私たちは見守って行かなければならないのではないかと思います。

**牧野** 本当におっしゃる通りなのですけれど、なぜその子育てのことで話し合う時間がないかというところ、これまた長時間労働で親は長いこと預かってほしい、今この厳しい会社を経営していく上でそんなに早く帰って来られないというほど、本当に長時間労働なのです。この経済的な不況の中で、みな短時間で家に帰って来られるかというと実際にはそうではなくて、人員だけをリストラして減少させて、残って

いる人がまた長時間労働になるのです。そこで、私たち日本人はどうしてもっと子どもと子育てと家庭を大事にできないのかということなのです。長時間労働を解消するために家に帰りたい、子どもと遊びたい、時間を大事にしたいと言って帰れるかどうか。帰れないでしょ。だから、そこでもやはり経済成長、能率、効率。最後のところで出した二項対立のような問題になります。赤ん坊が中心になれるということは、本当に能率は悪い、でも、ものすごく興味深い存在だ、そういうことを楽しめる社会の余裕というものを失っているのです。私たちは家庭を大事にするという少し恥ずかしい。なぜならそれは家庭がいろんなものを背負い込まされて、ドロドロしたものを持っているから。家に帰るといふことは囲われた私的な世界に帰ってしまうことになるのです。公的なところでの活躍とは離れたような思いを持たされる。だから、育児休業を取ると男らしくないとか、立派に会社で働く人ではないと思われる。経済なんかよりもっとこちらのほうが大事ではないかと言える仕組みになっていないと、子どもを育てる質というのが家庭の中でも支援の場でも全然向上していかない。支援の場でも、能率・効率の世界で、長時間働くということにならないようにしないといけないと思うのですけどね。

星 イタリアは経済状態が日本よりはるかに悪いのですよ。でも、みんな帰ってきてしまうのです。だから、帰ってしまえばいいのですよ。みんなが解雇されたら会社だって困るのだから。そうじゃないですか？日本の子育て支援はまだ初期です。先ほど私がメゾンヴェルトの例を出したのは、長時間サードピスするとそれが基礎になって、これが当たり前という基礎ができる。それは日本だって同じだと思うのです。保育園だって同じでしょ。「保育園はこういうものだ」という長い歴史の中で基礎ができて、

その中でしか考えられなくなってしまった。でも、子育て支援事業はまだまだ初期の段階だから、私はチャンスだと思っております。「これが子育て支援」というものをつくるチャンスだと。現場の先生はみなさんとっても熱心だから、与えられたものの中で何とか遣り繰りしてしまうのですよね。無理してしまうのですよ。現場がいちばん無理をしてしまうのだと思います。そうではなくて、これだけは譲れないというものをそれぞれのところで作っていかれて、やはり主張していく。「これだけのお金がいるのです」、「これだけしか働けないです」、「これだけの時間しかとれないのです」、「これだけの時間をください」ということを、やはり言っていかなければいけないのです。「与えられた中でなんとか頑張らしましょう」では、やはりダメなのだと思うのです。今の保育園が苦しい中でやっているのと同じ状況ができてしまうとします。誰が他にやるのですか、保育の場を。子育て支援の場を変えるのに、つくるのに。

**フロアからの発言3** いま星先生がおっしゃっていたように、子育て支援施設ができて、ようやく第二種社会福祉事業として広場も一時預かりも認められてきて、やはり今こそ本当にベースづくりをきちっとしておかないといけないと思いました。貧弱な子育て支援がどんどんどんどん蔓延してしまいそうで



心配です。

現在、中学校区に1つというところで、全国に広場が1万ヶ所も増やされようとしています。急激に、ですね。広場というものが何だか分からないのに、そこにスタッフが置かれ、安い賃金で「これをやれ、あれをやれ」と言われます。一応、ガイドラインのようなものは昨年夏にできたのですが、非常に大まかで、わざとそうしてあるとおっしゃっているのですが、いざそこに保育士が置かれたとしても、何をやっていいのか分からないままに時間だけが過ぎ、ようやく分かる頃には「何これ？」というふうになりかねない、ということをしごく感じています。この大地震のときでも、昨日も「預かり保育は朝8時から通常どおりにやってください」と言われて、もう私たちは本当に怒り狂いそうになりながら仕事につきました。私たちが「こういうことがある、ああいうことがある」と言っても、区の人たちとは全然繋がらないのですよ。結局、土日なので区は休んでいるけれども、私たちは土日祭日もやらされているような状況です。ここでケンカをしてもしょうがないので、行政とは手を組んでやっているのですけれども、どういった方向でやっていったらよいのかが分からなくて。

星先生のお話にありました、児童館と保育園、幼稚園が一体的に支援をしていくというピストイアのやり方に、私も非常に興味があつて、一度見学にでも行きたいなと漠然と感じています。日本の子育て支援とか保育とか、本当に保育園や幼稚園の中だけではなく、地域として向上していくにはどういう方向で行ったらいのかということ、日々とても感じています。この1年、2年がすごく大事だなと思つています。

大戸 ありがとうございます。子育て力を支援していくそのセンター自体も、十分に機能するためにはいろいろな条件が必要だということですね。その条件の一つとして、この公共、地方自治体がしっかりと意識を持ってほしいのですけれど、しょっちゅう人事が変わるのです。それで、「私は知りません」、ただ与えられたことだけをする、あるいは何もしないのがいちばんいい、みたいな人が課長になってきますから、そういう中で現場は非常に悪戦苦闘をしています。しかし、そのもう一つ前に、牧野先生がおっしゃったこの日本の労働条件、この厳しさは何なのでしょうね。世界有数の経済大国だというのに、大変な長時間労働で縛られています。

子育て支援を良くするためのツールは大変いっぱいあるのですが、遥かに遠いものもありますが、一つではないということです。いろいろと蘇生する道はいっぱいありますので、みんなで注意深く、選挙のとき、建物を建て替えるとき、いろいろなときに目を光らせて、質を高めることに標準を置いて、日本の子ども、日本の未来を、しっかりと築くことに力を合わせてまいりましょう。

それでは、最後に浜口先生に閉めていただきます。

【閉会のあいさつ】

浜口 今日はお二人の先生の講演もさることながら、その後の話し合いも有意義なものとなり、ありがたく存じます。おそらくフロアの中には、そろそろ私も何か言いたくなってきたのに、というところまで終わってしまう残念さを噛みしめておられる方もいらっしゃると思いますけれども、今日きつと何かを掴んで帰って行かれると思います。本日のシンポジウムがそういう場になっていましたら、私たちも何か報われたような思いがいたします。本日は大変足の悪いときに参加していただき、どうもありがとうございます。

それでは最後に、講演してくださった先生方に感謝の拍手で終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます。大戸先生もどうもありがとうございました。

〔記録・南陽 慶子・大野 理実〕



# 子育て力の危機と創生

～エンパワーメントの視点から～

少子化、子育て不安、虐待増加・・・など、いま、日本社会では子育てをめぐる危機感が高まっています。最近の「子育て支援」や「幼保一体化」を進める動きは、日本の子育て環境を本当に元気にしているのでしょうか。

日本の保育施策と現場の関係、フランス・イタリアの最新の保育状況、そして日本社会の子育て力について、最先端のお話をお聞きしながら考えてまいりましょう。

村山 祐一 氏 (帝京大学 教授)

## 保育所をめぐる子育て力育成の現状と課題

牧野 カツコ 氏 (お茶の水女子大学 名誉教授)

## 日本社会における子育て力育成の課題

— 家族と地域の子育て力をどう高めるか —

星 三和子 氏 (十文字学園女子大学 教授)

## フランス・イタリアにおける子育て力育成の現状

◆日時 2011年3月13日(日) 13:00～17:00

◆会場 お茶の水女子大学 共通講義棟1号館 304室

参加費: 無料

申込方法: ①お名前(ふりがな)、②ご住所、③ご所属を明記のうえ、  
メール(下記参照)にて事前申込をお願いします。(当日参加も可能です)

### 【主催】

お茶の水女子大学特別経費

「乳幼児教育を基軸とした

生涯学習モデルの構築」事業

(ECCELL)

### 【お問い合わせ】

お茶の水女子大学 ECCELL

電話&FAX: 03-5978-5663 / 03-5978-5949

E-mail : nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

ECCELLホームページ:

<http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji/>

お茶大子ども学ブックレット Vol.1

---

2012年9月10日 初版第1刷 発行

2013年3月11日 第2刷 発行

発 行 国立大学法人特別経費事業「乳幼児教育を基軸とした生涯  
学習モデルの構築」(**ECCELL**)

浜口 順子

編 集 満田 琴美

連絡先 〒112-8610

東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学本館 335 室

TEL&FAX 03-5978-5663

E-mail nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

URL <http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji/>

---

印 刷 光写真印刷株式会社